

平成29年度北海道科学技術賞に本学から2氏
本学名誉教授が「平成29年度北海道社会貢献賞（国際協力功労者）」を受賞
北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）の実施と合格者の発表

お知らせ

・被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに



■ 全学ニュース

- 1 平成29年度北海道科学技術賞に本学から2氏
- 2 梅村孝司名誉教授が「平成29年度北海道社会貢献賞（国際協力功労者）」を受賞
- 3 北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表
- 6 韓国北海道大学ヨルリョンチョ会総会を開催
- 7 北海道大学欧州同窓会を設立、ヘルシンキで同窓会懇談会及びアンバサダー委嘱状交付式を開催
- 8 北大フロンティア基金
- 10 平成30年度予算案（本学関係分）の主要事項
- 13 平成29年 北大ペンハロー賞授与式を挙行
- 13 国際連携機構日本語研修コース修了式(2017年10月入学者)
- 14 平成29年度春季外国人留学生フェアウェルパーティーを開催
- 15 ルワンダ大学で「日本留学フェア」を開催
- 16 高等教育研修センターにて研修会を開催
- 17 レアアース（希土類）レスモータを「札幌モーターショー2018」に出展
- 18 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで第34回「赤い糸会&緑の会」を開催
- 19 国際連携研究教育局(GI-CoRE)食水土資源グローバルステーションが「バイオマスリファイナリー：バイオマス作物から化成品・バイオ燃料生産に関する国際シンポジウム」を開催

■ 部局ニュース

- 20 低温科学研究所が紋別市と連携協定を締結
- 20 平成29年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏技術職員研修を開催
- 21 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2017」を開催
- 22 国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院で博士論文の指導法に関するFD研修会を開催
- 22 国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院で平成29年度第2回研究セミナーを開催



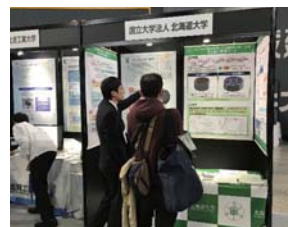
低温科学研究所
紋別市と連携協定を締結



先端生命科学研究院
FDSD研修会「総会2017」



平成29年度春季外国人留学生フェアウェルパーティー



札幌モーターショー 2018に出展

- 23 「大学院水産科学院・水産学部主催業界研究セミナー」を開催
- 23 平成29年度水産科学院・水産学部外国人留学生送別懇談会を開催
- 24 工学研究院で北海道工学教育協会研究集会を開催
- 25 大学院授業の一環として学生がミュージアムグッズ「デスモスチルスUSB」を開発
- 25 マサチューセッツ大学図書館員を附属図書館に招聘
- 26 保健センターで第7回健康キャンパス北大「『うつ』って何？あなたの周りの人のための心の応急処置を学ぶ」を開催

■ お知らせ

- 27 共済組合員の皆様へ
被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに

■ 定年退職を迎えるにあたって 29

■ レクリエーション

- 38 教職員フットサル同好会が2018「コンサドーレ・エスポラーダカップ」全道市町村サッカー・フットサル大会に参加

■ 諸会議の開催状況 39

■ 学内規程 39

■ 研修

- 40 平成29年度「プレゼンテーション」講座

■ 表敬訪問 40



大学院水産科学院・水産学部主催業界研究セミナー



ミュージアムグッズ「デスモスチルスUSB」を開発

表紙：一般入試前期日程の合格発表（2018.3.7、関連記事3頁に掲載）

裏表紙：北の鉄道風景㊦ キハ183系気動車

■ 全学ニュース

平成29年度北海道科学技術賞に本学から2氏

平成29年度北海道科学技術賞を桜井泰憲名誉教授と農学研究院の中村太士教授が受賞されました。

この賞は、科学技術上の優れた発明、研究等を行い、北海道産業の振興、道民生活の向上など経済社会の発展等に功績のあった方に、知事表彰として贈呈されるものです。

2月20日（火）に、センチュリーロイヤルホテルにおいて、贈呈式が行われました。



受賞者記念撮影

（桜井名誉教授：前列左側、中村教授：前列中央）

（総務企画部広報課）

桜井泰憲名誉教授

桜井名誉教授は、「イカ類の再生産過程の成否に応答した資源変動の解明と高鮮度流通に関する研究」の功績により受賞されました。

同氏は、スルメイカの繁殖生態の全容を解明し、その成果を活用して海底地形と海面水温により推定産卵場を抽出し、その拡大・縮小の変化をもとに短中長期の気候変化に応答する資源変動の予測手法を確立しました。さらに、氏が開発したイカ類の採集・輸送・長期飼育手法は活魚流通にも寄与し、イカ類の活メによる高鮮度化流通システムの確立はイカ類の高付加価値化の道を拓きました。

氏のイカ類の生態、生産から流通まで至る統合的な研究は、海洋環境変化に伴うイカ類や魚類の資源変動予測による北海道の順応的沿岸漁業の存続、そして魚介類の高鮮度化流通による漁業経営の安定化に主導的役割を果たしました。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

農学研究院 中村太士教授

中村教授は、「北海道における自然環境の保全と再生に関する科学的評価と技術指針の確立」の功績により受賞されました。

同氏は、釧路湿原において、異なる生態系間を移動する物質の収支を計測し、湿原の陸地化、栄養化が進行するメカニズムを明らかにしました。また、集水域生態系の保全と管理、そして再生のための指針を提案し、自然再生協議会会長として牽引しました。さらに、北海道知床世界自然遺産地域において、ダム改良によるサケの遡上と自然産卵の拡大を実現し、日本の河川における新たな保全指針を提言しました。

北海道の自然環境を保全することは、観光業を強化し、道民の生活の質の向上につながります。氏はこれらを統合的に行うための科学的基盤を確立し、社会実装のために主導的役割を果たしました。

（農学院・農学研究院・農学部）

梅村孝司名誉教授が「平成29年度北海道社会貢献賞（国際協力功労者）」を受賞

梅村孝司名誉教授／人獣共通感染症リサーチセンター招へい教員が、国際協力機構（JICA）技術協力プロジェクト「モンゴル国獣医・畜産分野人材育成能力強化プロジェクト」を立ち上げ、モンゴルでの技術指導、北海道内の獣医系大学との連携によるモンゴルへの技術者派遣、モンゴルからの獣医師の受け入れを行い、モンゴルの獣医・畜産分野の技術向上と人材育成への多大な貢献をされていることに対して「平成29年度北海道社会貢献賞（国際協力功労者）」を受賞されました。

北海道社会貢献賞は、多年地方自治の進展、社会福祉の増進、保健衛生の向上等に貢献し、その功績が顕著なものに対して、北海道知事が表彰するものです。梅村名誉教授は、このうちの一つとして、国際協力の推進に貢献し、その功績が顕著な個人、団体、企

業へ贈られる「北海道社会貢献賞（国際協力功労者）」を受賞しました。

3月2日（金）に北海道庁で行われた表彰式では、辻 泰弘副知事から表彰状が手渡され、梅村名誉教授から「極めて親日的なモンゴル国への国際貢献を北海道大学のサポートを基盤に継続していきたい。モンゴル国は気候が似ている北海道との様々な分野での交流に特に期待しており、モンゴル国

への技術支援を北海道庁とJICAが一体となって継続・強化していただきたい」とのお言葉がありました。

また、表彰式終了後、獣医学研究院講堂において受賞記念講演が行われ、梅村名誉教授が「モンゴル獣医プロジェクトの活動と今後」について講演されました。

（獣医学院・獣医学研究院・獣医学部）



表彰状の授与



表彰状を手にする梅村名誉教授（左）

北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表

平成30年度一般入試の前期日程試験は2月25日（日）・26日（月）に、後期日程試験は3月12日（月）に実施しました。また、私費外国人留学生入試第2次選考は2月16日（金）に実施しました。各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者は5,833名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が7名いました。失格者を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は5,826名で、受験者は5,658名でした。

合格者は2,065名で、合格発表は、3月7日（水）午前9時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が745名で全体の36.1%。卒業年度別では、平成30年3月高等学校卒業者が1,282名で全体の62.1%。また、男女別では女子が591名で全体の28.6%でした。

2. 後期日程

志願者は4,016名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が2名いました。失格者を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は4,014名で、受験者は1,712名でした。

合格者は559名で、合格発表は、3月20日（火）午後4時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が100名で全体の17.9%。卒業年度別では、平成30年3月高等学校卒業者が348名で全体の62.3%。また、男女別では女子が133名で全体の23.8%でした。

3. 私費外国人留学生入試

私費外国人留学生入試の志願者は213名で、第1次選考の合格者は76名、第2次選考の受験者は62名、合格者は33名でした。

（学務部入試課）

平成30年度一般入試（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
総合入試	文系	95	398 (119)	18 (8)	380 (111)	4.0	107 (31)		
	理系	数学重点選抜群	129	526 (80)	10 (3)	516 (77)	4.0	139 (20)	
		物理重点選抜群	233	663 (74)	8 (0)	655 (74)	2.8	251 (21)	
		化学重点選抜群	233	704 (168)	26 (10)	678 (158)	2.9	251 (51)	
		生物重点選抜群	175	469 (184)	8 (4)	461 (180)	2.6	189 (72)	
		総合科学選抜群	247	615 (193)	20 (6)	595 (187)	2.4	266 (85)	
	学部別入試	文学部		118	321 (145)	5 (3)	316 (142)	2.7	129 (55)
教育学部		20	49 (26)	0 (0)	49 (26)	2.5	21 (11)		
法学部		140	351 (104)	1 (1)	350 (103)	2.5	145 (45)		
経済学部		140	390 (83)	4 (1)	386 (82)	2.8	145 (28)		
医学部		医学科		97	341 (80)	19 (6)	322 (74)	3.3	102 (15)
		保健学科	看護学専攻	60	174 (158)	15 (13)	159 (145)	2.7	64 (60)
			放射線技術科学専攻	28	99 (42)	6 (3)	93 (39)	3.3	30 (10)
			検査技術科学専攻	28	98 (58)	5 (5)	93 (53)	3.3	29 (18)
			理学療法学専攻	13	33 (10)	2 (1)	31 (9)	2.4	14 (6)
			作業療法学専攻	13	52 (31)	4 (3)	48 (28)	3.7	14 (8)
		歯学部		30	117 (34)	10 (3)	107 (31)	3.6	30 (10)
獣医学部		20	103 (56)	1 (0)	102 (56)	5.1	22 (14)		
水産学部		105	323 (87)	6 (2)	317 (85)	3.0	117 (31)		
計		1,924	5,826 (1,732)	168 (72)	5,658 (1,660)	2.9	2,065 (591)		

※ () 内の数字は女子で内数

平成30年度一般入試（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等			募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者	
学部別入試	文学部		37	304 (101)	186 (54)	118 (47)	3.2	43 (13)	
	教育学部		10	105 (40)	55 (20)	50 (20)	5.0	10 (2)	
	法学部		40	334 (68)	187 (38)	147 (30)	3.7	50 (11)	
	経済学部		20	157 (29)	105 (16)	52 (13)	2.6	26 (8)	
	理学部	数学科		13	115 (9)	58 (6)	57 (3)	4.4	14 (0)
		物理学科		5	103 (9)	58 (3)	45 (6)	9.0	9 (1)
		化学科		23	238 (46)	121 (18)	117 (28)	5.1	26 (3)
		生物科学科 生物学専修分野		10	84 (24)	45 (11)	39 (13)	3.9	12 (1)
		生物科学科 高分子機能学専修分野		5	50 (19)	26 (11)	24 (8)	4.8	6 (3)
		地球惑星科学科		5	80 (22)	40 (11)	40 (11)	8.0	7 (1)
	医学部	保健学科	放射線技術科学専攻	7	63 (27)	40 (15)	23 (12)	3.3	7 (3)
			検査技術科学専攻	7	61 (41)	45 (31)	16 (10)	2.3	8 (6)
			理学療法学専攻	4	30 (15)	16 (8)	14 (7)	3.5	5 (3)
	歯学部		8	108 (50)	51 (27)	57 (23)	7.1	9 (4)	
	薬学部		24	239 (79)	132 (42)	107 (37)	4.5	27 (9)	
	工学部	応用理工系学科		34	224 (18)	133 (11)	91 (7)	2.7	38 (0)
		情報エレクトロニクス学科		38	309 (27)	186 (13)	123 (14)	3.2	38 (5)
		機械知能工学科		30	270 (21)	169 (13)	101 (8)	3.4	33 (1)
		環境社会工学科		49	341 (62)	208 (37)	133 (25)	2.7	58 (10)
	農学部		53	369 (104)	214 (51)	155 (53)	2.9	56 (20)	
	獣医学部		15	93 (48)	31 (14)	62 (34)	4.1	15 (10)	
	水産学部		50	337 (72)	196 (34)	141 (38)	2.8	62 (19)	
	計			487	4,014 (931)	2,302 (484)	1,712 (447)	3.5	559 (133)

※ () 内の数字は女子で内数

平成30年度私費外国人留学生入試合格者数等一覧

学部・学科等

学部・学科・専攻・コース等		志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
文学部	人文科学科	27	(7)	1	(0)	0	(0)	0	(0)
教育学部	教育学科	6	(3)	4	(2)	4	(2)	0	(0)
法学部	法学課程	9	(4)	6	(4)	3	(1)	1	(1)
経済学部	経済学科	8	(2)	3	(1)	2	(1)	2	(1)
	経営学科	6	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
理学部	数学科	8	(4)	5	(4)	4	(4)	2	(2)
	物理学科	9	(0)	4	(0)	3	(0)	2	(0)
	化学科	3	(1)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	生物科学科	9	(4)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	(生物学専修分野)	3	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	(高分子機能学専修分野)	6	(4)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	地球惑星科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
医学部	医学科	2	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	保健学科	2	(0)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	看護学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	放射線技術科学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	検査技術科学専攻	2	(0)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	理学療法専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	作業療法専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
歯学部	歯学科	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
薬学部	薬科学科	5	(3)	2	(2)	2	(2)	1	(1)
	薬学科	3	(1)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
工学部	応用理工学学科	22	(9)	10	(3)	8	(2)	4	(1)
	応用物理学コース	2	(0)	2	(0)	1	(0)	0	(0)
	応用化学コース	15	(9)	3	(3)	2	(2)	1	(1)
	応用マテリアル工学コース	5	(0)	5	(0)	5	(0)	3	(0)
	情報エレクトロニクス学科	34	(5)	8	(2)	6	(2)	5	(2)
	情報理工学コース	21	(2)	1	(0)	0	(0)	0	(0)
	電気電子工学コース	2	(0)	2	(0)	2	(0)	2	(0)
	生体情報コース	3	(1)	2	(1)	1	(1)	1	(1)
	メディアネットワークコース	5	(0)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	電気制御システムコース	3	(2)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	機械知能工学科	15	(4)	4	(2)	2	(2)	2	(2)
	機械情報コース	7	(3)	3	(1)	1	(1)	1	(1)
	機械システムコース	8	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	環境社会工学科	12	(5)	5	(2)	5	(2)	2	(1)
	社会基盤学コース	3	(2)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	国土政策学コース	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	建築都市コース	3	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	環境工学コース	3	(1)	3	(1)	3	(1)	0	(0)
	資源循環システムコース	2	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
農学部	生物資源科学科	5	(4)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	応用生命科学科	3	(3)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	生物機能化学科	5	(3)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	森林科学科	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	畜産科学科	3	(3)	2	(2)	2	(2)	2	(2)
	生物環境工学科	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	農業経済学科	3	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
獣医学部	共同獣医学課程	2	(2)	2	(2)	2	(2)	0	(0)
水産学部	海洋生物科学科	9	(5)	8	(5)	7	(4)	2	(1)
	海洋資源科学科								
	増殖生命科学科								
	資源機能化学科								
合 計		213	(77)	76	(34)	62	(29)	33	(17)

※ () 内の数字は女子で内数

国・地域別

国・地域	志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
インドネシア	3	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
マレーシア	4	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
韓国	44	(10)	11	(4)	10	(4)	3	(1)
台湾	7	(3)	2	(2)	2	(2)	2	(2)
中国 (香港を含む)	155	(63)	63	(28)	50	(23)	28	(14)
合 計	213	(77)	76	(34)	62	(29)	33	(17)

※ () 内の数字は女子で内数

韓国北海道大学ヨルリョンチョ会総会を開催



総会参加者記念写真

2月3日（土）に韓国・ソウルにおいて、韓国北海道大学ヨルリョンチョ会総会が開催され、名和豊春総長が出席しました。総会には、韓国全土から20名の会員が集まり、韓国ソウルオフィスの車柱榮所長が司会進行を務めるなか、2017年度活動報告と2018年度活動計画（案）が報告され、活発な議論が行われました。

名和総長は来賓として挨拶を行い、本学の現況とともに、本学が発展するためには海外在住同窓生の支援が重要である旨を説明されました。また、新

たに北海道大学パートナーに就任したチェ インファ氏（江原大学校教授）とチョン ソンフン氏（ソウル南部地方法院主事）の2名に、名和総長から委嘱状が手交され、両氏から今後の抱負が述べられました。

総会後の懇談会では、同窓生から母校への熱い思いが語られ、今後、寄附を含めて大学へどのような支援ができるかを検討することとなりました。

総会へは名和総長が大学院生時代に同じ研究科に在籍していた同窓生も参加し、とても和やかな雰囲気の中で行



チェ パートナー（左）



チョン パートナー（左）

われました。

今回の訪問を機に韓国在住同窓生との交流がますます強まることが期待されます。

（総務企画部広報課）

北海道大学欧州同窓会を設立，ヘルシンキで同窓会懇談会及びアンバサダー委嘱状交付式を開催



懇談会参加者記念写真

北海道大学欧州同窓会懇談会及び北海道大学アンバサダー委嘱状交付式を，3月2日（金）にフィンランド・ヘルシンキ大学Porthania内で開催しました。

懇談会では，長谷川晃理事・副学長から本学の現況が説明された後，欧州在住同窓生によるミーティングが開かれ，「北海道大学欧州同窓会」を設立することが承認され，会長にErich J Windhab氏（スイス連邦工科大学チューリッヒ校教授），副会長に武田靖氏（本学名誉教授，スイス連邦工科大学チューリッヒ校研究員）が就任することが決まりました。併せて，事務局を欧州ヘルシンキオフィスに置き，活動が開始されることとなりました。

同会は，欧州在住の元留学生・元職員の他，本学の教育・研究に関心があ

る方も会員となることができます。当日のミーティングでも広く会員を募集することが確認されました。今後，欧州地区における会員同士の親睦や本学との連携が図られる予定であり，欧州地区における本学の支援組織となることが期待されます。

懇談会に引き続き開催された北海道大学アンバサダー委嘱状交付式では，長谷川理事・副学長から歓迎の挨拶が述べられた後，ウズベキスタンのBakhtiyor Anvarovich Islamov氏（プレハノフ・ロシア経済大学タシケント校，タシケント国立経済大学教授）及びカザフスタンのGulmira Sultangalieva氏（カザフ国立大学世界史学科長）の2名にアンバサダーの委嘱状が手交されました。手交後，お2人からは委嘱状受領の喜びと今後の抱負が述べられました。

北海道大学アンバサダーの称号は，居住地区における本学の広報パーソンとして，地区と本学を繋ぐ役割を担うことを期待して付与するもので，これまで17カ国28名の方に授与しています。

交付式終了後，本会合に参加した小山裕基在フィンランド日本国大使館次席・参事官及びJouko Väänänenヘルシンキ大学副学長から歓迎のメッセージをいただき，欧州同窓会への期待が述べられました。

本会合には，北海道大学アンバサダー・パートナー，欧州同窓生，在フィンランド日本国大使館，ヘルシンキ大学，アールト大学，トゥルク大学，オウル大学，東フィンランド大学，タンペレ大学，ラップランド大学，タルトゥ大学，現地研究機関・企業及び本学から教員・研究者・学生等45名が参加しました。

懇談会・委嘱式終了後，ヘルシンキ大学Porthania内Teachers Loungeにおいて食事が開催され，参加者は和やかに交流し，盛況のうちに幕を閉じました。

（総務企画部広報課）



就任挨拶する武田副会長



Islamovアンバサダー（右）



Sultangalievaアンバサダー（右）



小山次席・参事官の挨拶



Väänänenヘルシンキ大学副学長の挨拶

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を發揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報

基金累計額（2月28日現在）

21,784件 4,353,516,779円

2月のご寄附状況

法人等7社、個人79名の方々から17,577,310円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社イチヤママル長谷川水産、株式会社大岩工業、一般財団法人協済会、ツバメ工業株式会社、
北海道大学医学部附属看護学校 30回生

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	秋野 治郎	浅野 賢二	有川 二郎	五十嵐清美	今待 賢治	入澤 秀次	大澤 崇宏
小内 透	小原 大和	埴山 雅秀	片山 ナツ	金川 眞行	金山 雅弘	河本 充司	城内 正壽
橘田 岳也	斉藤 久	坂本 大介	桜井 謙介	三升畑元基	瀬名波栄潤	高取 健彦	高橋 幸江
田村 裕昭	土家 琢磨	堤 保博	寺澤 睦	豊田 威信	日野 睦雄	百町 国彦	平山 晃也
水谷 洋一	三田 昌輝	三田村好矩	三土 京子	南 洋志	室井 静代	森本 裕二	湯山 素
吉田 邦夫	吉田 広志	脇川 康夫	渡邊 尚吉				

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

株式会社イチヤママル長谷川水産、株式会社大岩工業、ツバメ工業株式会社

（個人）

金山 雅弘、橘田 岳也、高取 健彦、百町 国彦、平山 晃也、三田 昌輝、森本 裕二

感謝状の贈呈



パシフィックシステム株式会社 様
(平成30年2月27日)



佐々木俊夫 様
(平成30年2月27日)

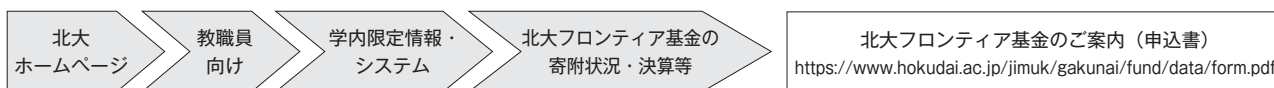


一般財団法人北海道青少年科学文化財団 様
(平成30年2月28日)

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上、基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡しします。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、基金事務室にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び基金事務室にご用意していますので、ご利用ください。

④ クレジットカードでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ (<https://www.hokudai.ac.jp/fund/form.html>) のクレジットカード寄附申込フォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

平成30年度予算案（本学関係分）の主要事項

平成30年度予算案（本学関係分）の主要事項は、次のとおりです。

事 項	摘 要
（平成29年12月22日閣議決定）	
【機能強化経費】 ○機能強化促進分 ○基幹経費化分 ○全国共同利用・共同実施分 ○教育関係共同実施分 ○新たな共同利用・共同研究体制の充実 ○附属病院機能強化分 ○数理・データサイエンス教育強化経費 ○法人運営活性化支援分	21件 2件 11件 5件 1件 1件 1件 1件 } 計43件 内訳は次頁のとおり
【施設整備事業】 ○環境資源バイオサイエンス研究棟改修 施設整備等事業（PFI事業14－14） ○工学部機械棟 <国債2－2> ○デンタルイノベーション拠点整備 <国債2－1>	〈(12,940㎡)〉 〈 3,300㎡ 〉 〈(6,010㎡)〉 ※ 〈()〉は全体改修面積、〈 〉は全体新営面積を表す

平成30年度機能強化経費内訳

【機能強化促進分】

事 項	部 局 等 名	事業期間
〔戦略①〕 持続可能社会の実現に向けた世界トップレベル研究推進・社会実装		
ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点構想	工学研究院, 農学研究院, 情報科学研究科	H30～H33
革新的コンビネーションマテリアルの創成ならびにグローバル展開拠点の構築	歯学研究院	H30～H33
知識が創造する光科学融合研究拠点	創成研究機構, 情報科学研究科, 理学研究院, 工学研究院, 電子科学研究所, 触媒科学研究所	H30～H33
バイオサーフィス国際連携研究教育拠点の構築	薬学研究院	H30～H33
次世代省エネを指向した強発光性の希土類錯体ポリマー開発 ～新規エレメントカップリング反応を鍵とするフォトニック錯体工学拠点の形成～	工学研究院, 理学研究院, 総合化学院, 地球環境科学研究院, 創成研究機構	H28～H30
量子医理工学による創造的医療研究 ～再発の心配のないがん治療への挑戦～	国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 医学研究院	H28～H30
人獣共通感染症克服に向けたイノベーション創出	国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 人獣共通感染症リサーチセンター	H28～H30
アイヌ・先住民との文化的共生に関する総合的・実践的研究	アイヌ・先住民研究センター	H28～H33
〔戦略②〕 最先端の国際連携研究拠点の構築と、次代を担う人材の育成		
ソフトマター国際連携研究教育拠点の構築：ソフトマター国際大学院の設置に向けて	先端生命科学研究院	H28～H32
ビッグデータとサイバーセキュリティの分野融合研究拠点の構築とITトップガン人材の育成 ～最先端研究と新学院構想～	情報科学研究科	H28～H33
〔戦略③〕 国際社会の発展に寄与する指導的・中核的人材の育成		
国際獣医師人材を育成する獣医学教育世界展開プログラム	獣医学部	H30～H33
「観光メディア学院」(仮称)設置を目指して ～異分野融合型教育による新たな観光創造人材の育成へ向けて	メディア・コミュニケーション研究院	H28～H33
持続的資源系人材育成プログラム	工学院	H28～H33
死因究明等を担う法医学的知識を有する人材育成プラン	医学研究院	H28～H32
熱帯アジア新興農業地域における生産基盤開拓新技術の現地教育研究拠点形成 ～主体的な学びと社会実装をめざした北大伝統の研究資産の再統合～	農学研究院	H28～H32
〔戦略④〕 4つの基本理念に基づく多様な人材育成のための全学的教育システム改革		
オープンエデュケーションを活用した先進的教育改革の拠点（オープンエデュケーションセンター）の機能強化	高等教育推進機構	H28～H31
未来型人材育成選抜試験の開発	高等教育推進機構	H28～H32
北海道大学総合IR推進事業 ～総合IRにより全学的教育改革の推進～	総合IR室	H29～H33
〔戦略⑤〕 国内外の地域や社会の活性化及び新たな価値の創造に貢献		
最先端フォトニクス材料・デバイスを支えるナノテク整備事業	電子科学研究所, 工学研究院, 理学研究院, 地球環境科学研究院, 情報科学研究科	H30～H33
学術・産学連携統合DBの構築と戦略的産学連携の展開	産学・地域協働推進機構	H30～H33
博士人材キャリア構築支援プラットフォームのグローバル化事業 ～世界から集まる優秀な博士人材が日本及び世界で活躍するためのグローバルなキャリア支援を目指して～	人材育成本部	H28～H33
合 計	21件	

【基幹経費化分】

事 項	部 局 等 名	事業期間
世界の課題解決に貢献するグローバル頭脳循環拠点の構築	国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 医学研究科, 人獣共通感染症リサーチセンター	H27～H31
札幌農学校の伝統を活かしたパイオニア人材教育機能の強化	農学研究院	H28～H31
計	2 件	

【共通政策課題分】

<全国共同利用・共同実施分：拠点認定分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
低温科学研究の推進　－学際的・分野開拓型低温科学の新展開－	低温科学研究所	H28～H33
感染癌の先端的共同利用・共同研究の推進	遺伝子病制御研究所	H28～H33
エネルギー・資源シフトを実現する触媒科学のグローバル共同研究拠点事業 －持続可能社会実現のための触媒科学研究拠点構築と人材育成－	触媒科学研究所	H28～H33
スラブ・ユーラシア地域研究にかかわる拠点	スラブ・ユーラシア研究センター	H28～H33
人獣共通感染症研究拠点基盤事業	人獣共通感染症リサーチセンター	H28～H33
北極域研究の推進　－異分野連携による革新的展開－	北極域研究センター	H28～H33
計	6 件	

<全国共同利用・共同実施分：プロジェクト分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
人・環境と物質をつなぐイノベーション創出ダイナミック・アライアンス	電子科学研究所	H28～H33
血管を標的とするナノ医療の実用化に向けた拠点形成 －がんを始めとする国民病を血管から治療する－	遺伝子病制御研究所，薬学研究院， 北海道大学病院	H28～H30
統合物質創製化学研究推進機構	触媒科学研究所	H28～H33
感染症制御に向けた研究・人材育成の連携基盤の確立 －人獣共通感染症克服に向けたイノベーション創出と地球規模の感染症対策－	人獣共通感染症リサーチセンター	H28～H33
北極域の持続可能性の実現に向けたイノベーション創出 －ロシア拠点を核とした産官学連携と人材育成－	北極域研究センター	H28～H33
計	5 件	

<教育関係共同実施分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
水産科学・海洋環境科学教育推進のための練習船プログラムの普及と中核的拠点の展開	水産学部	H28～H32
食糧基地，北海道の水圏環境を学ぶ体験型教育のための中核的拠点形成 －多様な水産資源を育む環境でのフィールド教育－	北方生物圏フィールド科学センター	H28～H31
FSDS共同推進事業　－PFUプログラムによる大学リーダーの養成－	高等教育推進機構	H28～H31
フィールドを使った森林環境と生態系保全に関する実践的教育のための中核的拠点形成	北方生物圏フィールド科学センター	H29～H33
寒流域における海洋生物・生態系統合的教育の国際的共同利用のための中核的拠点形成	北方生物圏フィールド科学センター	H29～H33
計	5 件	

<新たな共同利用・共同研究体制の充実（設備サポートセンター整備）>

事 項	部 局 等 名	事業期間
グローバルファシリティセンター ～先端機器共用促進・グローバル技術支援人材育成拠点構築～	創成研究機構	H28～H30
計	1 件	

<附属病院機能強化分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
附属病院における教育研究機能充実支援経費	北海道大学病院	
計	1 件	

<数理・データサイエンス教育強化経費>

事 項	部 局 等 名	事業期間
数理的データ活用能力育成特別教育プログラム ～数理・データサイエンス教育研究センターの設置～	数理・データサイエンス教育研究センター	H29～H33
計	1 件	

<法人運営活性化支援分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
法人運営活性化支援分		
計	1 件	

(財務部主計課)

平成29年 北大ペンハロー賞授与式を挙

2月22日（木）、情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において、平成29年北大ペンハロー賞の授与式を行い、児矢野マリ総長補佐から賞状の授与と記念品が贈呈されました。

北大ペンハロー賞は、平成17年度から開始され、本学学生の課外活動の充実と更なる活性化を図るため、都道府県規模の競技会・コンクールで優勝するなど、高い評価を受けた学生団体等を表彰する制度です。

今回は、12団体、42個人が受賞しました。今回までで、152団体、429個人の計581件に授与されています。

（学務部学生支援課）



授与式での記念写真

国際連携機構日本語研修コース修了式（2017年10月入学者）

国際連携機構日本語研修コース研修生の修了式を2月16日（金）に国際連携機構大会議室で行いました。

この研修コースは、大使館推薦等の国費外国人留学生、本学工学部に進学する日韓共同理工系学部留学生、現代日本学プログラム留学生、及び学内公募により履修が認められた留学生に日本語予備教育を行うため6ヶ月間開設されたものです。

今回修了式を迎えたのは、国費外国人留学生3名と日韓共同理工系学部留学生7名、現代日本学プログラム留学

生18名に加え、学内公募により履修を認められた集中日本語コース5名の計33名です。

修了式では、教職員や指導教員の方々が見守る中、笠原正典国際連携機構長から留学生一人ひとりに修了証書及び履修証明書が授与されました。続いて、笠原国際連携機構長より日本語で今後の飛躍を祈念する激励の言葉が述べられ、留学生は真剣な面持ちで聞き入っていました。

最後に記念写真を撮影し、修了式は終了しましたが、その後もしばらく、

お世話になった日本語教員や留学生同士で写真撮影や懇談が続いていました。

（国際部国際教務課）



笠原国際連携機構長による祝辞



集合写真
（国費外国人留学生、日韓共同理工系学部留学生、集中日本語コース留学生）



集合写真
（現代日本学プログラム留学生）

平成29年度春季外国人留学生フェアウェルパーティーを開催



記念写真

卒業生代表のウェスリーさん（右）と
オーロラさん（左）

2月16日（金）、北部食堂において、国際連携機構主催で平成30年3月期をもって修了となる留学生を対象としてフェアウェルパーティーを開催しました。

この行事は、出身国や専攻分野の垣根を越えて、留学生同士、及び日本人学生等との交流の機会を提供することで、本学での留学修了後も学生同士の繋がりをより強めることを目的に実施するもので、新渡戸カレッジ生を中心とした日本人学生ボランティア9名を含め、約80名の参加がありました。

パーティーは、総長補佐で国際連携機構留学生生活支援室長であるミシェル・ラフェイ・ケイ先生の挨拶に始まり、司会の蟹江紗耶子さん（農学院修士2年）、中村翔陽さん（総合教育部1年）の乾杯で開会しました。卒業生を代表して、HUSTEPのウェスリー・ヒューマンさん（南アフリカ出身）とオーロラ・インフェルトさん（スウェーデン出身）、そして保健科学院

生の金雪梅さん（中国出身）の3名により、本学在学中の思い出や周囲への感謝の気持ちが述べられました。

続いて、オープニングアクトとしてYOSAKOIソーラン北海道大学“縁”によるよさこいの演舞が披露され、気迫に満ちた力強いパフォーマンスに会場は盛り上がり、留学生は踊り手に合わせて手拍子を送るなど熱心に見入っていました。

パーティー後半には、北海道大学交響楽団のメンバーによるカルテットの生演奏に聞き入る姿や、エドガー・カ

ンバザさん（モザンビーク出身）による生ライブでは、留学生と一緒に歌う姿なども見られました。参加した留学生らは互いに写真を取り合い、メッセージを交換するなどをして別れを惜しんでいました。

このパーティーは日本人学生ボランティアが中心となって企画運営しており、パーティー終了後には早くも次のパーティーに向けた前向きな意見が多くみられました。

（国際部国際教務課）



ラフェイ先生による挨拶



パフォーマンスを楽しむ参加者

ルワンダ大学で「日本留学フェア」を開催

本学アフリカルサカオフィスでは、2月15日（木）・16日（金）の両日、ルワンダ共和国においてルワンダ大学との共催で「日本留学フェア」を開催しました。本フェアは、サブサハラ・アフリカ地域の優秀な学生の日本留学の促進を目的に、本学が文部科学省から受託している「留学コーディネーター配置事業」の一環として実施したものです。

ルワンダは、経済成長も堅調で、当域内では海外投資受入環境の整った国として認識されています。現在は域内でのICT立国を標榜するとともに、国民の生活水準の向上とさらなる経済成長の実現に向け、農業と教育が重要セクターの一つに位置づけられています。また、アフリカ地域での国連持続可能な開発目標の実現を担う団体（SDGC/A）を誘致し、当該地域での開発の牽引役たらしめています。日本に関しては、同国の難民問題への対応に尽力し、後にルワンダ大学から名誉博士号を授与された元国連難民高等弁務官の緒方貞子氏が知られています。

本フェアは、在ルワンダ日本国大使館、日本学術振興会（JSPS）ナイロビ研究連絡センター、国際協力機構（JICA）ルワンダ事務所の協力のもと開催しました。共催のルワンダ大学は、世界銀行の東部・南部アフリカ高等教育COEプロジェクト（ACE II）で4件の研究案件が採択される等、近年の興隆が目覚しく、今回日本の大学との交流の活性化が大いに期待されました。

今回は、従来の現地参加と資料参加に加え、テレビ会議システムを用いたオンラインによる参加方法を初めて導

入しました。その結果、現地で参加した本学及び神戸情報大学院大学に加え、日本学生支援機構（JASSO）、宮城大学、筑波大学、芝浦工業大学、東洋大学、広島大学、立命館アジア太平洋大学が日本からオンラインで参加しました。本学からは、アフリカルサカオフィス所長の奥村正裕獣医学研究院教授、同オフィス留学コーディネーターの中村 聡特任講師と成澤徳子特任助教、国際部から難波一宏特定専門職員の4名が参加しました。

初日は、教職員を主な対象として両国大学間の学術交流の可能性を探る合同ワークショップを開催し、ルワンダ大学の教職員を中心に約60名が集いました。ルワンダ大学のフィリップ・コトン副学長の開会挨拶、本学国際連携機構の川野辺創副機構長によるオンラインでの挨拶の後、溝口大助JSPSナイロビ研究連絡センター長から日本の研究支援プログラムの概略が説明され、元駐日ルワンダ共和国特命全権大使で日本に造詣の深いチャールズ・ムリガンデ副学長補からルワンダ大学のビジョン、重点分野、連携実績等について講演をいただきました。続いて、日本の大学から、教育研究分野の特色や、留学生に対する生活面でのサポート等についての説明が行われ、その後の質疑応答で、各大学の関心に応じた意見交換が行われました。

2日目の留学説明会では、ムリガンデ副学長補による開会挨拶の後、来賓の宮下孝之駐ルワンダ日本国特命全権大使、高田浩幸JICAルワンダ事務所長から祝辞をいただきました。続いて、本学奥村教授による挨拶が行われた後、JASSOの堤 逸郎留学情報課

長から日本留学の概要が説明され、在ルワンダ日本国大使館の田中 翠派遣員から日本政府の奨学制度について紹介が行われました。また、帯広畜産大学で博士号を取得したアンセルメ・シアカ氏が、日本での留学体験を紹介しました。その後、参加大学が各校の特長や留学制度について発表し、質疑応答で、学生からの日本語を交えた質問や日本留学への関心に回答しました。説明会の前後には、在ルワンダ日本国大使館、JSPS、JICA、あしながウガンダ、神戸情報大学院大学、本学による個別相談の時間を設けたほか、オンライン及び資料参加した19大学・機関*の案内資料を配布しました。本説明会は、開始前の会場入口や説明会後の個別相談に長蛇の列ができるなど、学生を中心に参加者は1,000名を超え、大盛況となりました。フェアの様子は、奥村教授へのインタビュー内容を含め、17日（土）に現地の新聞各社によって大々的に報道され、当国での日本留学への関心の高さがうかがえました。

アフリカルサカオフィスでは引き続き、教育機関、行政、援助機関や企業等と連携し、日本とアフリカ間の学術・学生交流を促進し、拡大する活動を実施していきます。

*JASSO、宮城大学、筑波大学、芝浦工業大学、東洋大学、広島大学、立命館アジア太平洋大学、小樽商科大学、東北大学大学院医工学研究科、山形大学、弘前大学、東京大学、東京海洋大学、上智大学、国際大学、富山大学、名古屋大学大学院国際開発研究科、京都大学、同志社大学大学院ビジネス研究科

（国際部国際連携課）



川野辺副機構長による開会挨拶



1,000名を超える参加者



熱心な参加者たち

高等教育研修センターにて研修会を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、1・2月に以下のとおり研修会を開催しました。

(高等教育推進機構)

英文Eメールライティング研修 参加者：フォーマット編18名、表現編20名

開催日：①1月26日（金） フォーマット編

②1月27日（土） 表現編

開催場所：情報教育館4階共用多目的教室（2）

開催概要：英語でのコミュニケーション機会が増えていることから、英文Eメールを素早く効果的に書く実践的スキルを身につけることを目的として、株式会社アルクによるライティング研修を開催。

フォーマット編では、場面に合わせた文章のフォーマル度及び依頼表現の丁寧度を使い分けるコツなどをトレーニングし、表現編では、日本語表現の適切な英訳及び明快な拒否表現など英語文化の表現法を学んだ。



英語コミュニケーション研修 参加者：リスニング編28名、スピーキング編25名

開催日：①2月16日（金） リスニング編

②2月17日（土） スピーキング編

開催場所：高等教育推進機構E棟E206, 207教室

開催概要：教職員への英語コミュニケーションの期待が高まっていることから、株式会社アルクによる、リスニング力及びスピーキング力向上のための研修を開催。リスニング研修では、英語を英語で理解できるようになるためのトレーニングと自己学習法を、スピーキング研修では、「何を」「どう」話すかを同時に行い、恐れずに英語を話すためのトレーニングを行った。



平成29年度第2回TF研修会 参加者：札幌キャンパス66名、函館キャンパス3名

開催日：2月20日（火）

開催場所：高等教育推進機構S講義棟S5講義室等

研修概要：TF（ティーチング・フェロー）従事予定者を対象に、大学院生が学部教育に参加するにあたって、事前に大学教育の基礎及び教育現場で守らなければならない心得を理解することを目的として開催。なお、本研修は、TFとして採用されるために、修了を義務づけられている研修の一つとなっている。



アクティブラーニング導入ワークショップ 参加者：9名

開催日：2月21日（水）

開催場所：情報教育館4階共用多目的教室（2）

開催概要：アクティブラーニングという言葉はすっかり浸透してきたが、その実態としてどのような授業を行えば良いのか、といった点についてはまだまだ共通理解が得られていない。アクティブラーニングを正しく理解し、自身の授業にどのように取り入れることができるかを考えることを目的として開催。



ループリック評価入門ワークショップ 参加者：17名

開催日：2月22日（木）

開催場所：情報教育館4階共用多目的教室（2）

開催概要：教員の成績評価における信頼性・客観性・透明性などが強く求められている現状において注目を集めているループリック評価について、基本的な知識を学び、実際にループリック評価表を作成することを目的として開催。



レアアース（希土類）レスモータを「札幌モーターショー2018」に出展

1月19日（金）～21日（日）、札幌ドームにて「札幌モーターショー2018」が開催され、「北海道自動車産業ゾーン」に本学の研究成果であるレアアースレスモータ（希少金属であるレアアースを用いないモータ）を出展しました。

本展示ゾーンは、北海道自動車産業ゾーン実行委員会（北海道及び独立行政法人中小企業基盤整備機構北海道本部）が主催し、北海道内企業の優れた技術やものづくりの魅力を広く伝えることで、道民の関心・理解の向上や次世代を担う人材育成、自動車関連産業や環境関連産業への参入推進を図ることを目的に展示されました。

本学からは、情報科学研究科システム情報科学専攻の小笠原悟司教授、竹本真紹准教授の技術シーズ「フェライト磁石を用いた60kWスポーク形埋込磁石同期モータ」の技術を紹介しました。展示ブースでは、資料に興味を

持った120名以上の来場者から、多くの質問がありました。

3日間のイベント来場者は95,903名（主催者発表）と大盛況の中、本学の

技術シーズと地域との係わりを大いにアピールすることができました。

（産学・地域協働推進機構）



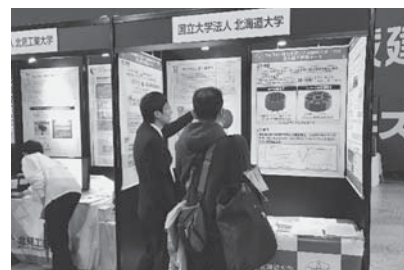
本学ブースの様子



札幌モーターショーの様子



本学展示ブースで対応中の研究室学生



人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 第34回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、2月15日（木）に八芳園（東京都港区）にて本年度第3回「赤い糸会&緑の会」を開催しました。本会は、企業と若手研究者（DC、PD）との直接情報交換会であり、企業には若手研究者の高い専門性や総合力を理解いただき、若手研究者には企業の研究開発活動や企業における博士の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で「赤い糸会&緑の会」は通算34回目の開催となり、若手研究者の参加も回を重ねるにつれ増加し、10部局から35名（DC34名、PD1名）が参加し、また、平成26年度末より採択された科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業で、他大学から若手研究者10名（東北大学3名、名古屋大学2名、兵庫県立大学1名、お茶の水女子大学2名、大阪大学1名、横浜国立大学1名）も参加しました。企業からは、総勢65名（各種業界18社・38名、オブザーバ企業5社、オブザーバ大学8校）が参加しました。

本会では、冒頭の人材育成本部長の笠原正典理事・副学長による開会挨拶、赤い糸会担当の樋口直樹特任教授による趣旨説明の後、参加企業の皆様から業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行われました。さらには、この「赤い糸会&緑の会」を通じて企業に就職した若手研究者の先輩方が今回は7名企業説明会に参加し、後輩達に対して熱い思いを語ってくれました。

開催後の企業側のコメントからも、「初めて参加させていただきましたが、学生のポスタープレゼンなどご指導がうかがえる様子であり、学生にとって大変良い機会になっていると率直に感じました。企業にとっても学生と知り合える貴重な機会となりました」「毎年参加していますが、年々内容や運営が充実しているのを感じます」との声をいただきました。また参加した若手研究者からは、「改めて参加しなければわからないことが多く、本当に得る物が多かったです。今後も

参加を重ねて、情報収集を続けたいと思います」「企業の内容や気が合いそうかなどを判断できたのでとてもよかったです」といった嬉しい声も聞かれました。既に本年度の本会を通して平成31年春の博士の企業内定者が13名も出ており、本会の効果が期待されます。

終わりに、人材育成本部では以上の活動に加えて、企業事業所視察、Advanced COSA、J-window、キャリアパス多様化支援セミナー、キャリアマネジメントセミナー、企業での長期インターンシップ等を通して、これまで以上に若手研究者の実践力を高めることへ注力していくとともに、コンソーシアム結成により、東北大学や名古屋大学等が運営しているより多くの洗練されたプログラムも博士達に活用されています。今後ともご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページをぜひご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



笠原人材育成本部長の開会挨拶



樋口人材育成本部特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る若手研究者



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

国際連携研究教育局（GI-CoRE）食水土資源グローバルステーションが「バイオマスリファイナリー：バイオマス作物から化成品・バイオ燃料生産に関する国際シンポジウム」を開催

国際連携研究教育局（GI-CoRE）食水土資源グローバルステーションは、カリフォルニア大学デービス校（UC Davis）などの教員とともに、様々な国際食資源問題の解決に向けた研究と教育を推進しています。2月5日（月）・6日（火）に工学部フロンティア応用科学研究棟で、「バイオマスリファイナリー：バイオマス作物から化成品・バイオ燃料生産に関する国際シンポジウム」を国際食資源学院、農学研究院、工学研究院との共催で開催しました。

食糧と競合しない非食のバイオマス作物の開発及び化石資源の一部をバイオマスに代替して有用な化成品・バイオ燃料を製造する「バイオマスリファイナリー」は、イノベーション技術開発の一つです。バイオマス利用に基づくバイオエコノミー社会構築は、地球規模で起きている人口増加や温暖化への対策として期待されています。この分野に関して、世界トップクラスの研究者である米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校のEvan DeLucia教授、ダートマス大学のLee Lynd教

授、神戸大学の近藤昭彦教授等の講演者を招聘し、UC Davisや本学のGI-CoRE教員とともに、最新の研究成果及び今後の展望について、講演会を行いました。また、今年度開設された国際食資源学院修士学生による中間研究発表会及びポスター発表も行いました。招待講演者や参加者らとの間で熱

心な討議が行われ、国際食資源学院の学生にとっては、国際プレゼンテーションの機会になったとともに、今後の研究に向けた貴重なアドバイスを得ることができました。

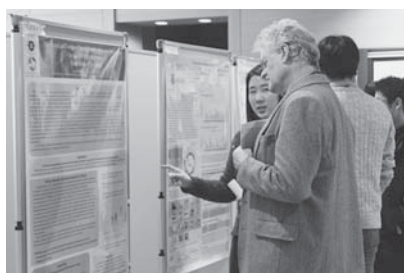
（国際連携研究教育局、国際食資源学院）



招待講演者と本学GI-CoRE教員



GI-CoRE教員 高須賀太一助教



大学院生によるポスター発表



■ 部局ニュース

低温科学研究所が紋別市と連携協定を締結

低温科学研究所では、2月19日（月）に紋別市と連携協定を締結しました。調印式は紋別市文化会館で行われ、紋別市から宮川良一市長、本研究所からは江淵直人所長が出席しました。

本研究所は昭和40年に流水研究施設を紋別市に設置し、オホーツク海の総合研究により、流水は地球環境や海洋生物の生産活動等に大きな影響を与えることを解明してきましたが、平成16年に施設を廃止・転換し、環オホーツク観測研究センターを札幌に設置しています。

今回の連携協定は、研究のみならず、紋別市と共に培ってきた学術、文

化、人材育成の分野において、より緊密で組織的な協力関係を構築し、教育、地域振興の分野においても相互の発展充実を目的として締結されたものです。また、協定締結により、紋別市海洋交流館内にあるオホーツク海洋研

究室は新たな研究拠点となり、今後ますます積極的に交流連携が期待されます。

（低温科学研究所）



協定書を取り交わす宮川市長（右）と江淵所長



連携協定調印式後の記念講演の様子

平成29年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏技術職員研修を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、2月6日（火）～8日（木）に、平成29年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏技術職員研修を開催しました。この研修は、本学及び道内大学のフィールド系技術職員を対象に、職務に関する必要な専門的知識と技術等を広く修得させることを目的として開催したものです。今年度は、「ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）」「気象」をキーワードに施設見学及び実習・講義を行い、23名が参加しました。

初日は、はじめに、技術職員5名の

技術発表、北海道農業指導士である生物生産研究農場の橋本哲也技術専門職員による「農薬の安全・適正使用について」の講義を行いました。午後は、気象庁札幌管区気象台に移動し、気象防災部職員2名による「北海道の気候変化と異常天候早期警戒情報について」の講義及び施設見学により、日頃の気象台業務について詳しく学びました。最後は、岩見沢市企画財政部企業立地情報化推進室長の黄瀬信之氏による「岩見沢市が取り組む農業気象サービスの可能性について」の講義が行われました。夜には、北大マルシェ Café & Labo（百年記念会館1階）で

懇親会が行われ、受講者のみならず、講師の先生、佐藤冬樹副センター長、森林圏管理技術室・情報技術室・事務部の職員も出席しました。

懇親会では、生物生産研究農場の三谷朋弘助教より、北大マルシェ Café & Laboが目指す理念について説明があった後、センターで収穫された生産物が利用された料理も提供され、遠隔地にあるため普段はあまり交流できない教職員とも職種を超えた親睦を深め、人的なネットワーク作りにも繋がりました。

2・3日目の講義として、生態系変動解析分野の白川北斗特任助教による



気象庁札幌管区気象台視察



黄瀬氏による講義



好井准教授による講義

「水産生物研究における補助器具とその活用事例の紹介」、農学研究院の石井一暢准教授による「道内におけるICT農業とドローンの活用について」、農学研究院の加藤知助教による「太陽光誘起クロロフィル蛍光による野外光合成量推定」、獣医学研究院の好井健太郎准教授による「北海道におけるダニによる感染症とそのリスク

について」が行われました。

実習として、公益財団法人札幌市防災協会の講師3名による「普通応急手当講習Ⅱ」が行われ、受講者全員に講習修了証が交付されました。

今年度は、12名の講師の皆様にご協力いただき、最新の研究等の情報を得ることができました。さらに、技術発表等により、各施設での技術職員の業

務内容についての相互理解や技術交流・親睦が深められました。開催にあたり、ご指導・ご協力をいただいた先生方、岩見沢市、気象庁札幌管区气象台、公益財団法人札幌市防災協会の皆様、ご支援をいただいた事務担当者の方々に深くお礼申し上げます。

(北方生物圏フィールド科学センター)

先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2017」を開催

先端生命科学研究院では2月13日(火)に理学部7号館310室にて平成29年度FDSD研修会「総会2017」を開催しました。今年度も教育・研究担当の全教員及び研究室の事務・技術職員を対象とし、同研究院の諸研究・教育活動報告とともに、理学・生命科学事務部の業務報告も実施しました。出席者は、教職員47名、事務部30名、他3名の計80名でした。

プログラムは3部構成で、1. 講演「数理・データサイエンス教育プログラムの概要」、2. 研究院の活動報告、3. 教えて！理学・生命科学事務部の活動で行われました。プログラム1では、数理・データサイエンス教育研究センター長の長谷山美紀教授より、同センターの設立の経緯と共に、学部教育で提供されるデータ指向の教育プログラム(1年次：一般教育、2～3年次：専門教育、4年次：実践教育)の計画やニーズ調査の結果などについてライフサイエンス系の事例も交えながら概要説明がありました。会

場からは、実際の卒業研究での利用方法など活発な意見交換もありました。

プログラム2では、出村 誠研究院長から、急速な社会変革・持続可能な開発目標(SDGs)への人材育成やデータの資源としての発想転換が大学教育にも求められていることが指摘されました。本学が取り組む第3期中期目標・中期計画の概説とともに、先端生命科学研究院の今年度の研究推進(GI-CoREソフトマターグローバルステーション、産業創出部門、先端基盤研究共用促進事業)、教育改革(ICT活用、新渡戸ポートフォリオの部局導入、ソフトマター専攻設置(平成30年4月))、研究・教育環境(スマホ版学修支援ポータルサイト(MTSinfo)開発、ハラスメント自己点検)、リスクマネジメント、及び門出健次副研究院長から、サステイナブル(北キャンパス総合研究棟2号館のLED照明、換気窓設備による節電対策)など取り組みの概要説明がありました。

プログラム3では、理学・生命科学

事務部の各担当業務への事前質問を整理し、教職員の疑問に直接回答する形式で進行了ました。担当事務からの説明に加え、研究院長による補足説明も行われました。

研修会終了後には先端生命科学研究院と理学・生命科学事務部の意見交換会も行われ、今後の大学教育・研究環境の改善に教員と事務職員との協働意識を更に深めることができました。

◆開催概要ホームページ新着情報

<https://life.sci.hokudai.ac.jp/fa/>

(生命科学院・先端生命科学研究院)



会場の様子



プログラム1 長谷山センター長



プログラム2 出村研究院長、門出副研究院長



プログラム3 理学・生命科学事務部(営繕担当、会計担当、図書担当)

国際広報メディア・観光学院，メディア・コミュニケーション研究院で博士論文の指導法に関するFD研修会を開催

国際広報・メディア観光学院，メディア・コミュニケーション研究院は1月26日（金）にFD研修会を開催し，本学名誉教授の室橋春光先生（現札幌学院大学教授）をお招きして「博士論文作成に向けた効果的指導について」と題して講演を行っていただきました。

実験心理学が専門の室橋先生はまず，研究分野や学生の背景などが急速に多様化していること，そして学生それぞれの才能を見出し，モチベーションを維持し，論文の完成に向けて導く必要があることを指摘した上で，学生同士のコミュニケーション，とりわけ信頼関係が有形無形の力になることを強調されました。文系部局の大学院では実験室がある理系とは異なり個人研究の色合いが強く，また院生研究室でも静寂が求められます。それ自体は必

要なことですが，研究室に閉じこもってしまうと研究指導が教員に限られてしまいます。学生間ならではの知識や技術の伝達があるというご指摘に蒙を啓かされました。

さらに，個々の学生への指導では学生としてだけでなく同じ研究者として接することの重要性と，教員の側にも考えるべき点が多々あることが指摘されました。研究者として遇されることで自信がつき，自分が尊重されているという安心感も得られますが，指導教員と副指導教員の考えが異なると学生には大きな負担となります。指導教員は，相互間ではもとより内外の共同研究者とのコンタクトを良好に維持すべきであるというご指摘には強い説得力がありました。

大学院生の中にはフルタイムの学生だけでなく社会人学生も多数おり，ま

たタイプや背景文化だけでなく時間の使い方も大きく異なります。今回の講演は，様々なバックグラウンドを持つ学生たちそれぞれの特性を見極め，丁寧に導くことが博士研究を完成させるための近道であると結ばれ，出席した49名はその後の質疑も含めて有意義なお話を伺うことができました。

（国際広報メディア・観光学院，メディア・コミュニケーション研究院）



講演する室橋名誉教授

国際広報メディア・観光学院，メディア・コミュニケーション研究院で平成29年度第2回研究セミナーを開催

国際広報メディア・観光学院，メディア・コミュニケーション研究院では，2月20日（火）にメディア・コミュニケーション研究院407室において，本年度第2回研究セミナーを開催しました。この研究セミナーは，研究院，学院の教員，大学院生に専門分野を超えた交流と議論の場を提供し，新しい研究の方向や分野融合の糸口を探るための機会とすることを目的に，研究成果公開委員会によって毎年2回程度行われています。今回の研究セミナーでは，平成28年4月に本研究院メディア文化論分野に赴任した富成絢子准教授が，「批判的談話分析から見えるジェンダーとディスコース：『すべての女性が輝く社会づくり』の政策文書にみられるジェンダー」というテーマで講演を行いました。

講演では，平成26年に安倍内閣が経

済政策の一環として提示した「すべての女性が輝く社会づくり」の政策文書の批判的談話研究の枠組みを用いた言語学的分析が示されました。この分析によって，この政策文書は，女性を中心に据えた文書のようにありながら，女性は客体化され，助けを待っている存在として描かれていることや不安や問題を抱えていると想定された様々な女性たちの要望に応じた施策を数多く提示することで，女性に対しての政策

を推進していくことがアピールされていることなどが明らかになりました。その後，参加者との間で30分にわたる活発な質疑応答が行われました。ジェンダーをめぐる言説が明示的・暗示的に示す価値観を考えるための貴重な機会となりました。

（国際広報メディア・観光学院，メディア・コミュニケーション研究院）



富成准教授による講演



質疑応答の様子

「大学院水産科学院・水産学部主催業界研究セミナー」を開催

2月8日（木）・9日（金）にフォーポイントバイシェラトン函館において、函館キャンパスの学生向けに業界研究セミナーを開催しました。本セミナーは、キャリア支援の一環としてブース形式で企業の採用担当者と面談を行う機会を設け、面接など本格的な選考過程に入る前に企業等への理解を一層広げ深めてもらうことを目的として実施しています。

函館キャンパスの学生は、東京や札幌等の主要な都市で行われている合同企業説明会や就職活動セミナー等に参加することが地理的・時間的に難しく、企業の皆様と直接対面し、コミュニケーションをとる今回のセミナーは大変重要な機会となっています。

参加企業は、森永乳業株式会社、サッポロビール株式会社、カルビー株式会社、日本水産株式会社をはじめとする食品製造及び水産系の人気企業に加え、大塚製薬株式会社、大正製薬ホールディングスグループなどの大手

製薬会社や、その他IT、流通、小売、官公庁など幅広い業界にわたり、合計64社が参加しました。さらに、就職情報会社による就職相談コーナーも設けられ、就職活動全般の相談やエントリーシート添削等を希望する学生の対応にあたっていました。

本セミナーは1回40分サイクルで、1日6回までのスケジュールで組まれており、企業ブースを訪問した学生は、これまでの企業研究を活かしながら集中力を持続させ、真剣な眼差しで採用担当者の生の声に耳を傾けてお

り、また積極的に採用担当者へ質問をするなど、非常に熱心な様子がうかがえました。学生は、限られた時間を上手く利用して就職相談コーナーを利用するなど、参加者はそれぞれの歩き方で本セミナーに参加していました。2日間で延べ146名の学生が参加し、盛況のうちに終えることができました。

この取組みは、今後もキャリア支援の一環として、より一層充実させた形で継続していく予定です。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



企業ブースを訪問する学生



グループディスカッションに参加する学生

平成29年度水産科学院・水産学部外国人留学生送別懇談会を開催



記念撮影

2月16日（金）に函館キャンパス厚生会館において、本年3月をもって修了・卒業する外国人留学生の送別懇談会を開催しました。外国人留学生とご家族のほか、函館キャンパスの教職員も含め、48名の出席がありました。

安井 肇研究院長の挨拶に続き、今村 央国際交流委員会委員長の乾杯で

開会し、和やかな懇談の後、修了・卒業する外国人留学生が紹介され、スピーチと記念品の贈呈式を行いました。スピーチでは、来日した当初の苦労話や留学生生活の思い出、指導してくれた先生への感謝の気持ち、修了後の進路、将来の希望を熱く語り、会場は感動的な雰囲気になりました。



安井研究院長の挨拶

最後は、都木靖彰国際教育室長の乾杯の後、記念撮影を行い盛況のうちに閉会となりました。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)



歓談中の様子



修了留学生と指導教員との記念撮影

工学研究院で北海道工学教育協会研究集会を開催

2月7日(水)、工学部アカデミックラウンジ2において、平成29年度北海道工学教育協会研究集会「高専と大学を通した一貫教育による高等工学系人材育成の可能性」を開催しました。本研究集会は、北海道地区における工学教育の振興を図ることを目的とした北海道工学教育協会が、加盟校の協力を得て毎年開催しているもので、今年度は本学が当番校を務めました。

はじめに、北海道工学教育協会会長

の増田隆夫工学研究院長から開会挨拶が述べられた後、文部科学省高等教育局専門教育課の小野隆彦科学・技術教育係長から、大学、高等専門学校(以下、高専)等を含めた工学系教育改革の動向等について説明があり、続いて、小林幸徳工学院院长から、本学の高専編入生の受け入れ及び人材育成の状況が紹介されました。最後に、但野茂国立高等専門学校機構理事／函館工業高等専門学校長から、高専教育の質

保証と国際展開について講演がありました。研究集会には、学内外から33名が参加し、各講演後の質疑応答では、活発な意見交換が行われました。

研究集会終了後は、工学部食堂において情報交換会が開催され、和やかな雰囲気の中、閉会となりました。

(工学院・工学研究院・工学部)



開会挨拶を行う増田工学研究院長



講演する文部科学省高等教育局専門教育課の小野科学・技術教育係長



講演する小林工学院院长



講演する但野国立高等専門学校機構理事



質疑応答の様子



情報交換会の様子

大学院授業の一環として学生がミュージアムグッズ「デスモスチルスUSB」を開発

大学院の授業「博物館コミュニケーション特論 ミュージアムグッズの開発と評価」(担当: 総合博物館・湯浅万紀子教授)の受講生4名が、総合博物館オリジナルのグッズを開発しました。同館で展示している古生物の骨格標本をモチーフにした「デスモスチルスUSB」です。昨年春に販売開始した「ぼけっとミュージアム」(ハンドタオル)と「Go-to Museum Tote & Badges」(トートバッグと缶バッジ)に続く2016年度の学生企画商品です。大学院の授業においてマーケティング調査をもとに検討を重ね、総合博物館に展示されているデスモスチルスとその研究に関心を深めていただきたい、そして

日常に使用できる博物館のオリジナルグッズを開発したいとの学生の思いから、実現しました。

USBの本体にはデスモスチルスがデザインされています。また、本体には数々の特典データが内蔵されています。本学の卒業生で大阪市立自然史博物館の学芸員であり、沼田町化石館と総合博物館の研究員を務める田中嘉寛さんが展示室でデスモスチルスについて解説する動画、デスモスチルスの発掘から調査・研究そして展示に関する解説テキストや写真、デスモスチルスの壁紙です。デザインと解説の監修は田中さん、映像制作は高等教育推進機構の藤田良治准教授が担当し、動

画には田中さんとともに学生が出演しています。

館内の「ミュージアムショップ」とインフォメーションセンター「エルムの森」ショップで販売しています。ぜひお手にとってご覧ください。グッズ開発の経緯を伝える授業の様子は、総合博物館のウェブサイトで紹介しています。

◆<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/cat/lesson/communication3/>

(総合博物館)

2016年度「博物館コミュニケーション特論 ミュージアムグッズの開発と評価」

担当学生: 江間章斗 (情報科学研究科), 亀井大輝 (農学院), 佐藤駿哉 (理学院), 牧口 謙 (理学院)

監 修: 田中嘉寛 (大阪市立自然史博物館)

映像制作: 藤田良治 (高等教育推進機構)

協力: 小林快次 (総合博物館), 山下俊介 (総合博物館)

指導教員: 湯浅万紀子 (総合博物館)



デスモスチルスUSB (4GB, 担当した大学院生特典データ内蔵, 税込1,500円)



内蔵特典データ(展示室での専門家による解説)



内蔵特典データ(展示室で専門家から解説を聞く担当学生)

マサチューセッツ大学図書館員を附属図書館に招聘

附属図書館では、1月28日(日)～2月1日(木)に、マサチューセッツ大学アマースト校(UMass Amherst, 以下, UMass)の図書館でラーニングコモンズ・コーディネーターを務めるキャロル・ウィル氏を招聘しました。この企画は、平成26年に締結した

附属図書館とUMass図書館の連携協定に基づき実施されたものです。

ウィル氏は滞在中、附属図書館(本館, 北図書館)の視察や、本学図書館職員との情報交換などを行うとともに、学生、教職員等、図書館職員に向けて北米の大学図書館における学習支

援に関する講演を行いました。

29日(月)に、学生有志企画「トビタテ! 留学カフェ特別会」とラーニングサポートセンターとの共催事業である「英語コミュニケーション(臨時回)」で、UMass図書館や北米における学生のアカデミックライフに関する

講演を行いました。参加した学生はウィル氏の説明に興味をかき立てられた様子でした。

30日（火）には、大学図書館職員を対象とした講演会を開催し、学内及び近郊の大学図書館から30名が参加しました。MicroclimateやTiered Modelなどの最新の大学図書館活動の紹介があり、参加した図書館職員に大きな刺激を与えました。

31日（水）には、高等教育研修センターとの連携により、学習支援担当者や関心のある教職員等を対象とした講演会が行われ、学内外から29名が参加しました。UMass図書館の学習支援についてのウィル氏の講演の他に、本学図書館の学習支援体制についても紹

介しました。参加者から、教員と職員のつながりを強めるためにどのようなことをしているかという質問があり、意見交換が行われました。

全日程終了後にウィル氏からも、学生や教職員との対話や交流の中で得るものが多くあったという感想が寄せら

れました。

附属図書館では、今後も海外の図書館員との相互交流を進め、図書館活動の国際化を図っていく予定です。

（附属図書館）



講演するウィル氏



学生に説明するウィル氏

保健センターで第7回健康キャンパス北大「『うつ』って何？あなたの周りの人のための心の応急処置を学ぶ」を開催

保健センターでは、12月15日（金）に保健センターラウンジにおいて、第7回健康キャンパス北大「『うつ』って何？あなたの周りの人のための心の応急処置を学ぶ」を開催し、教職員・学生約30名の参加がありました。

「うつ」という言葉はよく耳にしますが、何となくわかっていないようでわからないのが「うつ」ではないでしょうか。周りの方がどのような状態の時に「うつ」を疑うのでしょうか。その時には、どのように声をかけたらよいのでしょうか。そのような迷いが少しでも解消されるように、北海道大学病院精神科神経科の橋本直樹助教から解説がありました。橋本助教は、講演の最後に、もし友達などがうつ病で入院するようなことがあったら、誰も見舞いに来ないというケースが見受けられるので、他科の病気と同様に見舞いに

行ってあげてほしい、と結ばれ、接し方に関する気づきの機会となりました。講演後は、実際にどのように声をかけてあげるとよいのかなどロールプレイを用いたゲートキーパーの実習が行われました。

終了後のアンケートでは、「うつの中の実情を知ることができた」「自殺、精神疾患関係の話を聞ける機会はなかなかないので良かった」「自分や周囲の人の異常に気づく契機になり、

今後自分を客観視しやすくなるかも」などに加え、「今回のようなものをもっと少し時間をとって行ってほしい」「小規模なので話が聞きやすく、実演も良かった」などの声が寄せられました。

本センターでは、今後も教職員・学生向けに「健康キャンパス北大」を開催する予定です。

（保健センター）



熱心に受講する参加者



実習の様子

■お知らせ

共済組合員の皆様へ

被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに

新たに被扶養者として認定となる場合、又は被扶養者としての資格を失う場合は、組合員証を添えて「被扶養者申告書」を下記の添付書類とともに、速やかに所属部局の共済事務担当係へ提出願います。

なお、届出が30日を超えると、組合員の皆様に不利益（医療費の返還・国民年金等）が生じる場合がありますのでご注意ください。

新たに被扶養者となる場合（認定）

1. 子供が生まれたとき・・・戸籍謄本等
 2. 結婚したとき・・・戸籍謄本、住民票謄本、扶養の申立書等
 3. 会社を退職したとき・・・戸籍謄本、住民票謄本、扶養の申立書及び雇用保険関係書類等
- ※住民票謄本は、個人番号と住民票コードを謄写省略し、それ以外は謄写省略不可です。
- ※配偶者の認定の場合は、同時に国民年金の変更手続きも必要となります。詳細につきましては、所属部局の共済事務担当係へお問い合わせください。

被扶養者が今年度中に満22歳に達し、来年度以降も引き続き扶養する場合（認定更新）

扶養の申立書（認定更新用）は、必須書類です。その他の添付書類は、学生：在学証明書等、無職：所得証明書、パート等：給与及び報酬支給（見込）証明書等です。

※4月中に速やかに手続きし、所得証明書は、昨年収入のため7月初旬に提出してください。

※夫婦共同扶養の場合は、源泉徴収票の写し・確定申告書等の写し等が必要です。

被扶養者としての資格を失う場合（取消）

1. 就職したとき・・・①採用辞令の写し ②採用年月日確認のため在職証明書等
2. 死亡したとき・・・埋葬許可証若しくは火葬許可証の写し又は戸籍謄本
3. 所得が増えたとき・・・給与及び報酬支給（見込）等証明書、年金受給者の場合は年金証書又は年金改定通知書の写し及び申立書、確定申告書の写し等

※将来に向かって1年間（注1）に130万円以上の収入が見込まれるときは、恒常的所得とみなし、見込まれる時点（給与の支給日ではなく、就労開始日等、被扶養者としての要件を欠くに至った事実が生じた日）において取消となります。

（注1）暦年（1月～12月）又は会計年度（4月～翌年3月）という特定の期間の所得ではなく、どの時点からも将来にわたり見込まれる所得です。

※年末調整における所得の見方とは異なりますのでご注意願います。

※130万円を12ヶ月で割った108,333円を月額限度額として参考にしてください。

※障害年金受給者、60歳以上の公的年金受給者は、180万円以上、月額15万円以上です。

※給与所得とは、通勤手当や賞与等の諸手当を含み、税金等控除前の給与所得総額を指します。手取りの金額ではありませんのでご注意願います。

※収入がある方は、「給与及び報酬支給（見込）等証明書」と1年間で130万円を超えないこと等を記載した「念書」（就労する本人と組合員）を認定時や要件の確認時等に提出していただきます。その際、3ヶ月平均で、108,333円を超える月があるときは、どうして、月額が108,333円を超過するかの具体的な理由を申立書に追記してください。

※「給与及び報酬支給（見込）等証明書」の様式については、所属部局の共済事務担当より指定された様式を使用し提出願います。

※自営業の方は、毎月の収支がわかるように帳簿等をご用意願います。認定取消・認定継続の判断としてください。その上で収入が多い月に注意し、速やかに所属部局の共済事務担当者にご相談ください。（領収証等の保存をお願いします。）

※事業所得等については、必要経費の考え方が所得税法上とは異なり、限定されますのでご注意ください。

○必要経費：仕入れ品の代価（売上原価）、賃金（人件費）、消耗品費、事業所と住居が別の場合の地代家賃と光熱給水費（メーターが別）及び通信費（TEL番号が別）、不動産所得の修理費及び管理費

< 注 意 >

- ①被扶養者としての資格を失っているにもかかわらず、扶養取消の手続きをせずに医療機関等で組合員証を使用した場合は、後日その分の医療費を返還していただくことになります。
特に、例年9月の組合員証等の扶養の確認時、あるいは所得税法上の所得調査等の関係で所得額超過が発覚し、高額な返還金が発生する事例が数多く見受けられますのでご注意ください。
なお、社会保険の適用がなくても収入増加等で認定取消しますので、取消事実が判明したら、共済組合員被扶養者証を使用せず、部局等担当者に早期返戻願います。
- ②取消の届出が30日を超えてなされた場合は、上記の添付書類の他に「遅延申立書」が必要となります。（届出の遅延につきましては、財務省等の監査時においても厳しい指摘を受けていることから、速やかに届出をお願いします。）
- ③認定・取消、いずれの場合も必ず事実発生日を確認できる公的な書類及び証明書等の添付が必要となります。申立書のみでの認定・取消をすることはできませんので、ご承知お願います。
- ④戸籍謄本等の証明書類については、3ヶ月以内に発行されたものを添付願います。
- ⑤共済組合への提出書類の訂正は、必ず訂正印を使用願います。（砂消・ホワイト不可）
- ⑥申告書、申立書等の申告者等氏名については、必ず署名（ゴム印等不可）となりますのでご注意ください。
- ⑦申告書等への押印については、シャチハタ以外の印鑑を使用し、鮮明に押印願います。
- ⑧申告書の申告年月日、申立書の記載年月日は訂正せず、申告書等を書き直してください。
- ⑨申告書は、認定・認定取消・認定更新はそれぞれを別の申告書でお願いします。
- ⑩不備がある場合は、受理することができないため、提出書類一式を返却させていただくことになります。例えば、「写し」とは原本のコピーです。「重ね文字」は、訂正と訂正印が必要です。
- ⑪申告書等の記載は、黒ボールペンを使用し、消せるボールペンは使用しないでください。

上記については一般的な例であり、この他にも認定又は取消の対象に該当する場合がありますので、被扶養者に異動があったときは、速やかに所属部局の共済事務担当にご相談願います。

なお、パートや事業所得及び雑所得（資産運用により生じた収入を含む）の月収入総額（通勤手当等含む）が3ヶ月平均で、108,334円以上となった場合は、給与証明書等を取り寄せ、見込みが年額130万円以上の場合は、認定取消手続きをし、見込みが年額130万円未満の場合は、申告書、申立書を所属部局の共済事務担当に提出し、認定が更新されます。

また、引越しをされて住所が変更になった場合は、「記載事項変更申告書」を所属部局の共済事務担当へ提出願います。その場合、組合員証等の住所は、ご本人で修正願います。

（文部科学省共済組合北海道支部）

■定年退職を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年退職される方々のお言葉と略歴を紹介します。

法学研究科教授

ふじわら まさのり
藤原 正則 氏



正直申しまして、特記すべき業績というほどのものはありません。しかし、恵まれた環境で研究させていただいた人間として、最低以上の研究業績はあげたと「本人」は思っています。一応は体系書を書きましたし(『不当利得法』(信山社・2002年、本年改訂版完成))、相当以上に面倒なテーマに関して、若干掘り下げた研究をしたと思っています(『不当利得法と担保物権法の交錯』(成文堂・1997年))。相続法の分野では、一定の発見をしたと考えています(「無権代理人を相続した本人、及び本人を相続した無権代理人の責任」、メディクス教授傘寿記念論文集、カール・ハイマン、2009年)。

他方、教育では、相当やったと思っています。同僚と協力して、司法試験などの資格試験対策を中心に、学生さんの将来の職業のためのボランティア活動(受験サークルの顧問、答案の添削など)を継続してきました。その際には、小職も論文で苦しんでいますから、答案を書く学生さんと、できる限り「近い目線で一緒に歩く」のが重要だと考えています。しかし、これは論文以上に結構疲れました。

最後に、恥をかかないように(「徒然草」の木登りの話ではありませんが、着地を失敗しないように)したいと思っています。

略 歴

生 年 月 日	昭和29年11月23日
昭和53年 3 月	北海道大学法学部卒業
昭和57年 3 月	北海道大学大学院法学研究科修士課程修了
昭和61年 3 月	北海道大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学
昭和61年 4 月	小樽商科大学短期大学部講師
昭和62年10月	小樽商科大学短期大学部助教授
昭和63年10月	小樽商科大学商学部助教授
平成 9 年 3 月	博士(法学)(北海道大学)
平成 9 年 4 月	北海道大学法学部教授
平成12年 4 月	北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター教授
平成13年 4 月	北海道大学大学院法学研究科教授

経済学研究院教授

こやま こういち
小山 光一 氏



アメリカのミネソタ大学で学位を取得後、平成2年に北海道大学に赴任してきました。着任当時の大学の印象として、経済学の研究資料が十分に整っていないことが残念でしたが、大学の気風が非常に自由で、自分のやりたい研究ができる環境だと思いました。アメリカでは経済理論の研究が中心でしたが、従来の経済理論では現実の経済問題に対応しておらず、現実の経済現象を十分に説明できないことに不満を持っていました。また、その時々流行の論文を読んで、その中で何か新しいものを見つけていくことに空しさを感じていました。ミネソタ大学での学位のテーマであったメカニズム・デザインの考えをベースにこれを発展させ、現実の制度の下でどのようなメカニズムが生じるのかを考える「制度の経済分析」を生涯のライフワークにしようと思いました。

しかしこのような研究は、法律などに定められた制度を数式を用いたモデルに変換していく作業があり、順調にいくものではありませんでした。ただ、アメリカで学位を取得した時の指導教員であったレオニード・ハーヴィッツ教授がノーベル経済学賞を受賞したことは非常に嬉しいことであり、メカニズム・デザインの研究を一貫してやってきてよかったと思いました。

私の研究は定年を迎えてもまだまだ未完成で、これから完成に向けて頑張っていかなければならない状況です。これからも一步一步、研究を進めていこうと思っています。

略 歴

生 年 月 日	昭和29年12月13日
昭和53年 3 月	慶應義塾大学経済学部卒業
昭和55年 3 月	一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了
平成元年10月	Ph.D (アメリカ・ミネソタ大学)
平成 2 年 4 月	北海道大学経済学部助教授
平成11年 8 月	北海道大学経済学部教授

理学研究院附属地震火山研究
観測センター教授

むらかみ まこと
村上 亮 氏



私は、火山活動に伴って発生する山体の変形データから火山活動の仕組みを解き明かす研究と教育に従事してきました。多くの活動的火山を抱える北海道を拠点とし、諸先輩が輝かしい実績を上げてこられた本学には、平成20年に赴任しました。同僚や学生達と道内の各火山に出向き、手つかずの大自然の中に観測装置を設置し、地下で発生している様々な現象に思いを馳せながら、充実した研究・教育人生を過ごさせていただきました。お世話になった多くの皆様に心から感謝します。

平成12年の有珠山噴火以降、北海道では、被害を伴う本格的な噴火は、幸い、発生していません。しかし、最近の10年間に絞っても、樽前山、十勝岳、雌阿寒岳の地下では、マグマ移動と考えられる地殻変動が検知されています。また、有珠山や北海道駒ヶ岳でも、地下深部への着実なマグマの蓄積を意味する、一定速度の地殻変動が見出されていて、道内活火山でも、次の噴火に向けた準備が着々と進んでいるように見えます。火山研究には、観測の息の長い継続が必要で、いよいよ本格的に火山活動が始まった際には、周到に準備した観測装置により貴重なデータが取得され、その後の火山学の飛躍的な発展をもたらします。後に続いてくださる方々のご活躍を心より祈念します。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年 7月24日
昭和54年 3月 東京大学理学部卒業
昭和54年 4月 国土地理院測地部技官
平成元年11月 理学博士（京都大学）
平成10年 4月 国土地理院地理地殻活動研究センター地殻変動研究室長
平成14年 4月 国土地理院地理地殻活動研究センター地理地殻活動総括研究官
平成19年 4月 国土地理院地理地殻活動研究センター長
平成20年 4月 北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター教授

農学研究院教授

かわばた じゅん
川端 潤 氏



私は祖父から三代にわたる生粋の札幌っ子で、昭和48年に北大理類に入学し、農学部農芸化学科に進学して大学院まで進み、すぐに助手に採用されて今に至ります。教養・学部生時代に教わったすばらしい講義で有機化学の魅力に目覚め、その後は一貫して天然物化学研究に携わってきました。当初の高磁場NMR装置を使った新しい測定法の開発と複雑な構造の化合物の構造解析という基礎的な研究から、最近の抗肥満・抗糖尿病作用物質の探索及び機能解明と機能性食品としての実用化という応用研究まで幅広い内容にわたり、楽しい研究生生活を送らせていただきました。

入学以来45年間、2年間の在外研究期間を除き、毎日毎日自宅から北大に通い続けた私は、道外勢の多い北大のなかでもさらにその比率が高い農学部にあっては逆にアウェー感満載の日々でしたが、こんな井の中の蛙のような世間の狭い人間が何とか無事に定年まで勤めてこられたのも、ひとえに歴代の教職員の皆様、そして何より素晴らしい学生さんたちの支えがあったからこそと感謝しております。

北大に通わない人生というものが想像もつきませんが、これまでの経験を生かして、また新たな人生を歩みなおす所存です。長い間本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年 9月16日
昭和52年 3月 北海道大学農学部農芸化学科卒業
昭和54年 3月 北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
昭和55年 9月 北海道大学大学院農学研究科博士課程中退
昭和55年10月 北海道大学農学部助手
昭和59年 9月 農学博士（北海道大学）
平成 4年 4月 北海道大学農学部助教授
平成11年 4月 北海道大学大学院農学研究科助教授
平成14年 8月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成19年 5月 } 北海道大学教育改革室室員
平成27年 3月 }
平成22年10月 } 北海道大学高等教育推進機構アカデミック・サポートセンター長
平成27年 3月 }

保健科学研究院教授

さ がわ ただし
佐川 正 氏

平成12年に前任の鈴木重統先生が定年退職された後に、私が赴任した時は医療技術短期大学部でしたが、その後、平成15年に4年制の医学部保健学科となり、平成20年に大学院も設置されて保健科学研究院となりました。母性看護学教授として看護学生、助産学生の教育・研究の指導を行ってまいりました。産科医師不足が社会的問題となり、助産師の役割は以前にも増して大きくなっていると思います。産科医師不足に伴って分娩取扱施設の集約化、助産師外来の設置、助産師による超音波検査の実施、助産師による救急電話相談など新たな試みが行われており、研究にもそのような新たな視点を積極的に取り入れてまいりました。また、5年程前から助産師教育が本研究院の修士課程で行われるようになり、私も毎年、1～2名の修士の大学院生を主指導教員として指導することになり、少しずつではありますが、研究成果も上がってきております。

私はこの4月から再雇用を希望しており、特任教授としてもう少し本研究院で働かせていただこうと思っております。現在、指導中の大学院生が数名おり、その学生たちの研究が纏まるまで微力ではありますが、もう少しお手伝いをさせていただこうと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年3月13日
 昭和54年3月 旭川医科大学医学部医学科卒業
 昭和58年12月 旭川医科大学大学院医学研究科博士課程修了
 昭和58年12月 医学博士（旭川医科大学）
 昭和59年1月 旭川医科大学医学部附属病院助手
 昭和62年7月 北海道立紋別病院
 平成元年4月 北海道大学医学部附属病院医員
 平成元年6月 市立芦別病院
 平成元年9月 北海道大学医学部附属病院医員
 平成元年11月 市立稚内病院
 平成2年1月 札幌マタニティホスピタル
 平成2年4月 北海道大学医学部附属病院助手
 平成5年8月 北海道大学医学部附属病院講師
 平成9年6月 北海道大学医学部附属病院分娩部副部長
 平成12年4月 北海道大学医療技術短期大学部教授
 平成15年10月 北海道大学医学部教授
 平成20年4月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

保健科学研究院教授

さ えき かず こ
佐伯 和子 氏

平成17年10月に金沢大学から赴任してきました。看護教育が短期大学や養成所から4年制大学へ移行が進む中において、最初の数年は、学士課程、修士課程、博士後期課程の開設が続き、教育課程の構築が大きな仕事でした。開設時、学部の保健学科看護学専攻では、看護師、保健師、助産師の3つの国家試験受験資格取得の課程がありました。大学の入学試験制度の改革と同時期に、学士課程は看護師教育のみとし、保健師、助産師の教育課程を修士課程に移行させました。2つの教育課程を大学院で行うのは、全国的にも先駆的な教育体制の構築でした。

少子高齢化が進み、医療制度改革に伴う在宅ケアの推進により、自立した看護職が求められています。生活に視点を当てた支援のみならず、地域づくりや健康政策を担える看護職の養成の重要性はますます大きくなっています。看護は発展途上の学問であり研究分野です。看護の領域での研究が大きく芽を出し、その成果が北大から世界に発信されることを願っています。

最後に、多くの方々に支えられて職業人生を送ることができましたことを、心から感謝申し上げます。

略 歴

昭和52年3月 法政大学社会学部社会学科卒業
 昭和55年3月 北海道立衛生学院看護婦第一科卒業
 昭和56年3月 北海道立衛生学院保健婦科卒業
 昭和56年4月 兵庫県技術吏員
 昭和60年4月 北海道技術吏員
 昭和62年4月 北海道立衛生学院保健婦科講師
 平成6年3月 琉球大学大学院保健学研究科修士課程修了
 平成6年4月 札幌医科大学教官、
 札幌医科大学保健医療学部看護学科助手
 平成8年1月 札幌医科大学保健医療学部看護学科講師
 平成9年4月 札幌医科大学保健医療学部看護学科助教授
 平成13年4月 金沢大学医学部教授
 平成15年4月 博士（保健学）（東京大学）
 平成17年4月 金沢大学大学院医学系研究科教授
 平成17年10月 北海道大学医学部教授
 平成20年4月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

保健科学研究院教授

やまなか まさのり
山中 正紀 氏



今春、定年を迎え、長きにわたりお世話になった北海道大学を退職することになりました。振り返れば、昭和53年1月1日に北海道大学医学部附属病院理学療法部に赴任し、それから40年間の北海道大学での生活が始まりました。その後、医療技術短期大学部理学療法学科の教員となり、現在の保健科学研究院まで35年間の教員生活となりました。

私は諸先輩の先生方からいただいた「教え」を学部生や大学院生に伝え、高い志を持った理学療法士の指導者・教育研究者を育成していくことが私の役割であると思い、多くの学部生はじめ博士課程と修士課程の修了生を送り出すことができました。医学部保健学科や大学院保健科学院を卒業された理学療法士の皆さんが、次代の理学療法をさらに発展させてくれることを願っています。

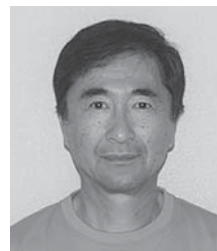
35年間の教員生活は私にとって刺激的であり、楽しい時間を過ごすことができたと思います。北大での充実した教員生活を終えることができたのも保健科学研究院の教員のみならず、事務職員の方々からのご助言、ご支援のおかげだと思います。本当にお世話になり皆様方に心より感謝申し上げます。最後に、保健科学研究院及び北海道大学がより発展することを願っています。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年3月24日
昭和51年3月	徳島県立盲学校高等部専攻科理学療法科卒業
昭和51年3月	社会福祉法人琴の浦リハビリテーションセンター理学療法士
昭和53年1月	北海道大学医学部附属病院理学療法部理学療法士
昭和58年4月	北海道大学医療技術短期大学部理学療法科助手
平成2年3月	北海学園大学法学部法律学科卒業
平成11年4月	北海道大学医療技術短期大学部理学療法科講師
平成12年3月	博士（医学）（北海道大学）
平成13年4月	北海道大学医療技術短期大学部理学療法科助教授
平成15年10月	北海道大学医学部教授
平成20年4月	北海道大学大学院保健科学研究院教授

水産科学研究院准教授

なかたに としくに
中谷 敏邦 氏



昭和61年7月に水産学部助手として採用され、今年で31年になりました。その間、諸先生方、事務の方々にご指導、ご支援を受け、無事に退職することが出来ます。在職中、一貫して海洋観測と海洋生物の採集を行ってききましたが、冬季の北海道の洋上という大変厳しい作業環境のもと、練習船うしお丸とおしよろ丸の方々に絶大なご支援をいただきました。

近年、持続可能資源の利用方法についての関心が高まっていますが、海洋に生息する食料資源としての魚類の保全は大変重要な研究課題です。基本的な対応としては、次世代に生命をつなぐ「繁殖行動」を妨げないことであり、対象生物の繁殖生態の解明が重要となります。私は北海道南西部太平洋に面した噴火湾でスケトウダラやカレイ類を対象として、産卵期、産卵場所、仔稚魚の餌生物などを調べ、未成魚期の生残と海洋環境の年変動を追跡してきました。まだまだ未解明なことが多く、今後の研究が待たれるところ です。

今後も練習船による観測が継続され、大切な食料資源である海洋生物の持続的利用に関する貴重な知見が得られることを願っています。

略 歴

生 年 月 日	昭和29年10月8日
昭和52年3月	北海道大学水産学部卒業
昭和55年3月	北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻修士課程修了
昭和59年3月	北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻博士課程修了
昭和59年3月	水産学博士（北海道大学）
昭和61年7月	北海道大学水産学部助手
平成4年4月	北海道大学水産学部助教授
平成12年4月	北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年4月	北海道大学大学院水産科学研究院助教授
平成19年4月	北海道大学大学院水産科学研究院准教授

水産学部准教授（兼）附属練習船
おしよ丸次席一等航海士

かじわら よしゆき
梶原 善之 氏



昭和58年、水産学部附属練習船北星丸三等航海士として採用以来、水産学部練習船航海士として35年勤めさせていただきました。当時は練習船にコンピュータが搭載されて間もない頃で、コンピュータ嫌いの一等航海士に、いかに便利な機械か分かってもらうのに苦心したことが思い出されます。現在あらゆる分野で利用されているGPSもなく、戦時中に開発された沿岸から数百キロしか利用できない航海計器がようやく自動化された程度で、外洋航海では昔ながらの天文航法を使っていました。海洋観測も転倒式温度計とナンゼン採水器の時代、北洋での観測は厳しい寒さの中でした。ハワイ航海の帰路に急速に発達する南岸低気圧に次々に遭遇し1週間近く船内に閉じ込められたこと、何週間も霧に包まれたアラスカ航海、濃霧の中から現れた壮大な島々や氷河、思い出は尽きません。

航海士養成課程の廃止後、水産学部生の他、全国各地の海洋系大学の学生も乗船する短期航海が増えましたが、学生達にとって練習船は今も夢を見せてくれる場であり、生きている魚類等の水産資源に直接触れ、地球規模の海洋環境を思い描く水産学・海洋学への入り口です。これからも練習船が海の未来を担う若者達を輩出する一翼を担うことを願っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年 7月22日
昭和53年 3月 北海道大学水産学部卒業
昭和54年 3月 北海道大学水産学部特設専攻科修了
昭和54年 4月 } 民間企業
昭和55年 1月 }
昭和58年 4月 北海道大学水産学部助手、附属練習船北星丸三等航海士
昭和62年10月 北海道大学水産学部附属練習船北星丸二等航海士
平成 5年 4月 北海道大学水産学部附属練習船おしよ丸一等航海士
平成 5年 5月 北海道大学水産学部講師
平成 7年 5月 北海道大学水産学部附属練習船北星丸一等航海士
平成12年 1月 北海道大学水産学部助教授
平成12年 4月 北海道大学水産学部附属練習船おしよ丸一等航海士
平成19年 4月 北海道大学水産学部准教授

産学・地域協働推進機構学術
主任専門職

やまぐち しげひこ
山口 茂彦 氏



昭和55年に本学農学部農芸化学科を卒業し、民間企業を経て、平成20年に知財・産学連携本部（現 産学推進本部）に特任准教授として、平成25年からは現職に採用していただき、定年の日を迎えることになりました。

企業では、研究開発部門、知的財産部門で経験を積んでまいりました。5年間程度国内の大学で研究する機会があり、その頃から、企業と大学との連携について関心を持ち、この10年間は、大学の立場で理想的な連携を模索してきたように思います。また、製品の事業化を、大学での基礎研究→企業との共同研究→社会実装と考えますと、最近では、大学は従来では企業の役割であった社会実装のプロセスに大きく関わってきており、この点を重視しました。

発明相談から始まり、特許戦略の検討、特許明細書の作成、権利化、企業との共同研究の調整（契約書の作成）等の業務で、発明者の先生や企業関係者と密に交流しながら、仕事を進めてまいりました。特に、個人的には、先生方との交流を大切にし、ご指導いただくことで、自分なりに成長できたのではないかと、感謝する次第です。

定年ではありますが、再雇用制度もあり、今しばらく大学でお世話になりますので、よろしくお願いします。

略 歴

昭和55年 3月 北海道大学農学部卒業
昭和55年 4月 } 民間企業
平成20年11月 }
平成 3年 5月 工学博士（名古屋大学）
平成13年11月 弁理士登録
平成18年 3月 筑波大学大学院ビジネス科学研究科（企業法務）修了
平成18年12月 付記弁理士
平成20年12月 北海道大学知財・産学連携本部特任准教授
平成25年 4月 北海道大学産学・地域協働推進機構学術主任専門職

施設部長

佐々木 力 氏



平成27年春に施設部長として赴任し、それ以来、仕事柄からも気分転換のジョギングからも素晴らしいキャンパス景観を堪能させていただきました。

情報基盤センター前のシダレザクラ、大野池のスイレン、恵迪の森のエンレイソウ・ニリンソウ、花木園のクロユリ、遠友学舎前のカツラの黄葉、弓道場脇のオシドリ・リス、そして歴史ある建物・先端的な建物などなど本当に奥が深く、自分が少しでもそれに貢献できたかと自問しているこの頃です。

そのなかで一番好きな景色は、5月に平成ポプラ並木から札幌駅方向を見たもので、手前から奥に牧草の緑、タンポポかジバシリの花の黄色、牛と羊、ポプラ並木、工学部・理学部の高層建物、JRタワーやマンションの超高層建物と青空が絶妙のバランスで配置されています。

ぜひ、これからもよりサステナブルでハイブリッドなキャンパスを目指してもらいたいと思います。そして皆さんもキャンパス内のいつもと違うところを散策してみれば、リフレッシュ効果とひらめきが生まれることを約束します。

キャンパス構成員の皆様、どうもありがとうございました。

略 歴

昭和51年 4月 東京工業大学施設部建築課
昭和54年 4月 東京工業大学総合理工学研究科等経理課
昭和55年 4月 東京工業大学施設部建築課
昭和61年12月 文部省大臣官房文教施設部技術課
昭和62年 4月 文部省大臣官房会計課用度班
平成元年 4月 文部省大臣官房文教施設部技術課
平成2年 1月 文部省大臣官房文教施設部技術課建築第二係主任
平成3年 4月 文部省大臣官房文教施設部技術課専門職員
平成6年 4月 国立教育会館会計課次長
平成9年 4月 文部省大臣官房文教施設部指導課専門職員（兼）防災推進係長
平成12年 4月 新潟大学施設部建築課長
平成14年 4月 筑波大学施設部企画課長
平成16年 2月 東北大学施設部企画課長
平成16年 4月 東北大学施設部計画課長
平成17年10月 文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付参事官補佐
平成18年 9月 防衛施設庁業務部提供施設課課長補佐
平成19年 9月 防衛省地方協力局提供施設課防衛部員
平成20年 8月 琉球大学施設運営部長
平成23年 4月 佐賀大学環境施設部長
平成25年 4月 群馬大学施設運営部長
平成27年 4月 北海道大学施設部長

医学系事務部長

小谷 正雄 氏



平成10年4月に旭川医科大学から本学に転任となり、その後の国立教育政策研究所、小樽商科大学を含め42年間の勤務を経て、この度定年を迎えることとなりました。

この間、嬉しかったこと、苦しかったこと、色々な場面が思い起こされますが、数多くの方々と親しくご交誼をいただき楽しく過ごすことができました。

こうして永い歳月大過なく勤めることができましたのも、ひとえに理解のある上司、心を割って話し合える同僚、頼りがいのある部下に恵まれ、さらにはご協力・ご支援をいただいた各部署の先生方と巡り会えたおかげであり、私にとって最高の幸せであったと感慨を新たにしております。本当に多くの方々に支えていただき心より感謝申し上げます。

最後になりますが、北海道大学が今後益々発展されることを祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略 歴

昭和51年 4月 旭川医科大学
平成10年 4月 北海道大学
平成11年 4月 国立教育政策研究所総務部会計課管理係長
平成14年 4月 北海道大学経理部情報処理課専門職員
平成16年 4月 北海道大学財務部主計課専門職員
平成16年10月 小樽商科大学財務課課長補佐
平成19年 4月 北海道大学学術国際部研究協力課課長補佐
平成19年12月 北海道大学学術国際部国際企画課課長補佐
平成20年 8月 北海道大学財務部調達課課長補佐
平成21年 4月 北海道大学函館キャンパス事務部事務長
平成24年 4月 北海道大学財務部調達課長
平成26年 4月 北海道大学理学・生命科学事務部長
平成28年 4月 北海道大学医学系事務部長

総務企画部次長

あさの けんじ 氏
浅野 賢二 氏

昭和59年工学部総務課を振り出しに、北海道大学に34年間勤務させていただき、この3月末をもって定年を迎えることになりました。

この間、緑が溢れる素晴らしいキャンパスのなかで、仕事はもとより、好きなスポーツなどを通じて、沢山の方と交流させていただき、本当に充実した時間を過ごさせていただきました。

ご厚誼いただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年10月28日
昭和59年 1 月	北海道大学
平成10年 4 月	釧路工業高等専門学校庶務課人事係長
平成13年 4 月	北海道大学理学研究科・理学部専門職員(人事担当)
平成15年 4 月	北海道大学総務部総務課秘書掛長
平成16年 4 月	北海道大学総務部総務課秘書室秘書係長
平成18年 9 月	北海道大学総務部人事課課長補佐
平成21年 4 月	北海道大学総務部職員課長
平成23年 4 月	北海道教育大学総務部人事課長
平成26年 4 月	北海道大学総務企画部広報課長
平成29年 4 月	北海道大学総務企画部次長

学務部学務企画課長

こんどう しゅんじ 氏
近藤 俊治 氏

昭和51年4月に室蘭工業大学に採用され、北海道大学、2度目の室蘭工業大学、北海道大学（まるで「鮭の回帰」のように）と合わせて計42年間（うち、北海道大学は18年）の勤務を終え、これまでの様々な光景が思い起こされますが、庶務、会計、学生支援、入試、教務系等の業務を経験し、諸先輩、同僚、後輩、そして関係教員の方々のご交誼をいただき、楽しく勤務させていただきましたことに心より深く感謝し、お礼を申し上げます。

採用の室蘭は、道南の田舎（現 せたな町）育ちの私にとっては、初めて見るネオン街があまりにも眩しすぎ、途轍も無く大都市に見え（当時の室蘭市は景気も良く、現在の約2倍の人口でした。）気の高揚が激しく感じられました。

仕事面では、当時の事務機器のリコピー（青焼き）、簡易タイプライター、輪転印刷機は、完全にOA化され、超アナログ人間の私にとっては、未だに便乗出来ずの毎日です。その後、20余年を経て、2度目の本学勤務が国立大学の法人化移行時でした。

法人化後の教育改革等は、目まぐるしいスピード感で進み、今後も大学を取り巻く環境は一層厳しい状況が続くと思いますが、北海道大学の特色を生かして益々発展されますことを祈念いたします。

最後に、この緑豊かな日本一のキャンパスを擁する、北海道大学の益々のご発展と、お世話になった皆様方のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年 4 月23日
昭和51年 4 月	室蘭工業大学庶務課
昭和54年 5 月	室蘭工業大学工学部（夜間）事務部
昭和57年10月	室蘭工業大学会計課
昭和63年 4 月	室蘭工業大学庶務課
平成 5 年 4 月	室蘭工業大学学生課
平成 8 年 4 月	北海道大学工学部教務課
平成12年 4 月	室蘭工業大学入学主幹入学試験係長
平成16年 4 月	北海道大学学務部教務課全学教育第二係長
平成19年 4 月	北海道大学学務部入試課係長（入試広報担当）
平成20年 4 月	北海道大学学務部教務課課長補佐
平成23年 4 月	北海道大学学務部入試課長
平成26年 4 月	北海道大学学務部教育推進課長
平成29年 4 月	北海道大学学務部学務企画課長

施設部施設企画課長

ながい まさひろ
永井 雅彦 氏



私は、分子科学研究所を皮切りに各地を巡り、この度、北海道大学で退職の日を迎えることになりました。これまで気候風土や伝統の異なる地域において、多くの施設整備に携わることが出来たことは最高の思い出です。

思い起こせば入所当時は何事も手書きであり、パソコンは無くワープロが主力でした。当然、図面は製図台で線を引き、トレーシングペーパーのシワを直しながら仕上げたものです。苦手だったのが内訳書の作成で、項目の記入ミスがあると数ページ書き直しが待っていました。

また、概算要求書の作成は課員総出の一大イベントでした。色鉛筆を持って線引きや塗り潰し、スクリーントーン貼り、失敗すれば徹夜でやり直しでした。現在はIT技術の発展により、パソコンで作業が完了します。あの頃の技術を後輩に引き継ぐことが出来ないのが少々残念な気持ちです。

私は若い頃からボンヤリしている質でしたので、先輩方からは仕事のこと、遊びのこと色々ご指導いただきました。技術は日々進歩していきますが、人格形成や能力向上にはやはり人と人の繋がりが大切だと感じます。

さて、大学の施設整備を取り巻く状況は厳しさを増しており、インフラ長寿命化の推進や新增築からリノベーションへと方向転換をしています。大変なことですが、教育研究環境が一層充実しますよう皆様のご尽力に期待します。長い間お世話になりました。どうもありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年1月4日
昭和55年3月 金沢工業大学工学部卒業
昭和55年4月 分子科学研究所経理部建築課
昭和56年4月 岡崎国立共同研究機構経理部建築課
昭和60年8月 東京医科歯科大学施設部建築課
平成6年4月 千葉大学施設部建築課第三工営係長
平成9年4月 東京大学施設部企画課企画掛長
平成12年4月 東京大学施設部建築課工営第二掛長
平成13年4月 北海道大学施設部建築課建築計画掛長
平成15年4月 旭川医科大学業務部施設課課長補佐
平成17年4月 北海道教育大学事務局財務部施設課総括主査
平成20年4月 北見工業大学施設課長
平成23年4月 室蘭工業大学施設グループマネージャー
平成26年4月 北海道大学施設部環境配慮促進課長
平成27年4月 北海道大学施設部施設企画課長

総務企画部総務課安全衛生室長

はぎわら としひろ
萩原 俊博 氏



教養部への採用からスタートし、以後36年間、文字どおりあっという間に過ぎたというのが偽らざる心境であり、気持ち的にはとても短く感じる時間でした。これも多くの方々に支えられ、助けていただき、大過なくこの日を迎えることができるからこそと深く感謝申し上げます。

大学行政に携わった者として最も強く印象に残っているのは、国立大学の位置づけが急激に変化していく過程を目の当たりにした「国立大学法人」への移行でした。事の善し悪しを見分けることはできませんでしたが、それが求められた時代ということであったのかもしれません。

本学はこれからも時代の変化に沿って動いていかなければなりません。同時に、フロンティア精神をはじめとする4つの「基本理念」は変わらずに持ち続けていくことが、ますます肝要になってくると思います。今後どのような道筋であれ、本学が名実ともにさらに発展・飛躍することを心より願っております。長い間、ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年3月12日
昭和57年4月 北海道大学教養部
昭和60年4月 北海道大学医学部附属病院総務課
昭和62年7月 北海道大学庶務部人事課
平成8年4月 北海道大学総務部総務課
平成10年4月 北見工業大学庶務課人事係長
平成12年9月 北海道大学総務部総務課専門職員(組織改革担当)
平成13年4月 北海道大学総務部企画室専門職員(組織改革担当)
平成16年4月 北海道大学企画部企画調整課組織整備掛長
平成16年7月 北海道大学企画部企画調整課企画調整係長
平成18年4月 放送大学北海道学習センター事務室長
平成22年4月 北海道大学医学系事務部総務課長
平成24年4月 北海道大学総務企画部総務課安全衛生室長

低温科学研究所事務長

みやうち まさゆき
宮内 政幸 氏



希望していた道内勤務が、昭和62年4月1日に歯学部総務課配属となり、それから31年が経過。移住実現は大きな転換点でした。

経過した31年間に、札幌市を離れること4回、登別市、旭川市、室蘭市、函館市に、それぞれ3年間転居（単身赴任2回）生活を経験。住めば都とはならなかった。

「出向」が、必ずしも有意義な体験とならなかったのは、こちら側に原因があるのかもしれない。

2～3年であちこちの部局を異動するのが理想でしたが、同種部局が9年というのがありさすがに辟易。

もっと多くの部局を経験して退職を迎えることが出来たらよかったかもしれません。

略 歴

平成28年4月 北海道大学低温科学研究所事務長

■レクリエーション

教職員フットサル同好会が2018 “コンサドーレ・エスポラーダカップ” 全道市町村サッカー・フットサル大会に参加

教職員フットサル同好会は、2月11日（日）・12日（月・祝）に札幌ドームで開催された2018 “コンサドーレ・エスポラーダカップ” 全道市町村サッカー・フットサル大会・シニアOVER35の部に出場しました。大会は0勝4敗と残念な結果で終わりましたが、札幌ドームでのプレーを楽しんだ2日間となりました。

この同好会は、初心者が多いことから、公式戦には参加せず、仲間とともにフットサルを楽しむことを第一の目的として活動しています。

活動に興味のある方は、同好会までご連絡ください。

◆hufc@academic.hokudai.ac.jp

（教職員フットサル同好会）

大会結果

教職員フットサル同好会	0 - 2	70's
教職員フットサル同好会	1 - 3	平取サッカークラブ
教職員フットサル同好会	0 - 2	ZEPET PLUS
教職員フットサル同好会	0 - 5	FC TSUBOTAKE 35



参加したメンバー

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成30年 2 月 7 日）

議 案・平成29年度教育研究総長表彰について

- ・平成30年度以降の部局評価配分事業について

協議事項・学術コンサルティング制度の制定について

- ・国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構との連携協力協定について

報告事項・平成30年度世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）の公募開始について

- ・超過勤務実績について
-

教育研究評議会（平成30年 2 月 14 日）

議 題・名誉学位の授与について

- ・国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）との連携協力協定について

報告事項・全学運用教員の間評価の報告について

- ・寄附分野の設置について
-

役員会（平成30年 2 月 21 日）

議 案・国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構との連携協力協定について

- ・名誉学位の授与について

報告事項・平成28事業年度決算剰余金の繰越承認について

※規程の制定，改廃については，「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学個人情報管理規程の一部を改正する規程

（平成30年 2 月 26 日海大達第10号）

国立大学法人北海道大学における人を対象とする医学系研究に関する規程の一部を改正する規程

（平成30年 2 月 26 日海大達第12号）

平成29年 5 月 30 日付けで，独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律が改正されたことに伴い，所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における独立行政法人等非識別加工情報の提供等に関する規程

（平成30年 2 月 26 日海大達第11号）

平成29年 5 月 30 日付けで，独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律が改正されたことに伴い，本学における独立行政法人等非識別加工情報の作成及び提供並びにその契約について所要の定めを行ったものです。

■ 研修

研修名：平成29年度「プレゼンテーション」講座

開催日：平成30年2月14日

開催場所：百年記念会館1階大会議室

研修目的：事務職員が「教職協働」により大学経営に参画していくためには、課題発見・解決能力から解決策等の提案・実行までの幅広い能力が求められる。本講座では、特にプレゼンテーションスキルを学習し、「わかりやすく話す力」の向上を目的として実施する。



講義・グループワーク（株式会社インソース）



実践プレゼンテーション演習（発表準備）



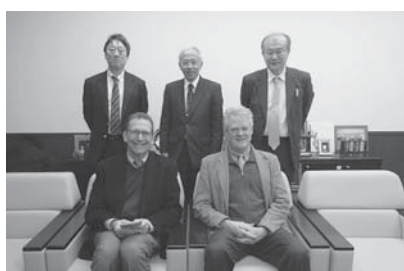
実践プレゼンテーション演習（受講生による発表）

（財務部主計課）

■ 表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
30.2.5	イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校（米国）Evan H. DeLucia教授，ダートマス大学（米国）Lee Lynd教授	国際連携研究教育局食水土資源グローバルステーション主催シンポジウムの基調講演に伴う来訪



イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校（米国）Evan H. DeLucia教授（前列左），ダートマス大学（米国）Lee Lynd教授（前列右）

（国際部国際連携課）

編集メモ

●寒さの中にも，日中は日差しに暖かさを感じられる日が増え，日ごとに春めいてきました。

●今年度の一般入試合格者発表は，3月7日（水）と20日（火）に行われました。一足早く春を勝ち取った受験生たちが家族や友人と喜び合う姿が見られ，多くの在學生からも温かいお祝いを受けていました。





2004.3.28 函館本線 大沼～大沼公園（七飯町）

北の鉄道風景 60 キハ183系気動車

北海道における特急列車網は1961年運行開始の特急「おおぞら」（函館－旭川）を嚆矢とする。それ以来、道内の特急列車網で使われ続けたキハ80系気動車の老朽置き換えを目的として開発されたのがキハ183系気動車だ。道内専用特急車両であるキハ183系気動車は、1981年の登場以来、今日まで道内各地を走り続けてきた。写真は道南の秀峰、駒ヶ岳を背景に札幌へ向かうキハ183系の特急「北斗」である。函館と札幌を結ぶ特急「北斗」には、1983年以来、

現在までキハ183系気動車が充当されてきた。その登場から既に三十余年が過ぎ去り、近年は老朽化が顕在化していた。その結果、2018年3月のダイヤ改正で、特急「北斗」は新型のキハ261系気動車「スーパー北斗」に置き換えられることとなった。国鉄時代から走り続けた列車の引退が決まり、一つの時代が終わったような気がする。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ③ No.768 平成30年3月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>